

圖窓外を眺めると赤城は半ば姿を雲にかくして根張りは幾十里實に名山たるに反  
かぬ我伊勢崎宣教所もかく長くそして強く根張りあるやうと祈つて袂別した

あさ川の流れやせたり脚高き

橋ゆさぶりて木枯の吹く

荷馬車ひくひ踊めの音も途絶へけり

夜寒の風や日野の古町

木の葉つむ正蓮寺坂越えくれば

風さわがしく日は落ちんぞす

### 松本しま子刀自をしのびて

水清き江戸川の流を江戸川橋に別れて昔ながらの町のあと江戸のおもかげのこゝ  
のみにしのばる音羽の町を過ぎゆけば護國寺の森にねぐらをいそぐ鳥の三つ四つ  
二つ夕ぐれの鐘にたち迷ふも心がらにやけふはいとどさびしげなり  
雪解の道の踏む足もとに重く松風の音すさまじく落ちてきてあたりあたりけうとく  
なりゆくに黄泉てふ國の近づきぬべき心ちぞするや  
雑木林にふるき新しき塚のいく重となく重りあいてあはれ老いたるも若きもひと  
しなみに苔の下に埋れはてけんはかなさよ  
花は咲き花は散れどあはれとながめ入らむ人もなくたゞ嵐にむせぶ夜半の月影に  
秋におくれし虫の聲々のいとど細りゆくのみこそ苔の下なるなき靈のうめきかと  
もしのばれてそとろに引き入れらるゝ心ちすれ

常磐木の松の緑のいく代かはるまじき御名も今はあだとなりし松本しま子刀自の  
 柩をこゝに埋め終へて一本の墓標の前に立てばありし世のさまのことごとくに浮び  
 きてはてしなき涙にかきくれまごう心ちのせん方なさはひとりわれらのみにはあ  
 らざりけらし下車坂の大路より少し南したるほとりの刀自がそのかみ住居をわけ  
 ても忘られぬ思ひ出の種なりける

日ごと夜ごとに夫の君もろとも龍泉寺町の神所に詣できて神の御諭にひたすら耳  
 をすまし道の誠を尊み御神樂の神勇を修めては世を救ひ人を助けむ條を明らめ嵐  
 吹く夜も雪降る朝も怠らずはげみいそしみし真心のをしきさよやがて東黒門町  
 に移り住みてそこにはじめて谿郷と稱ふる支教會を設けて教徒たちを撫で養ひつ  
 ゝありしが一年香具土の神の災にあひて今の西黒門町に新に宮居を定めて更に  
 婦人會の委員部を設けてその長に擧げられかくて人にいつかれ世に仰がれて家内  
 もおだいに身もすこやかにげにぞいく春を経て空ゆく月日のかぎり知らずのご

けくおはしましぬべかりけるものを今かうとみにかなしき遠き旅路に出で立ちま  
 さんとあゝ誰かは思ひかけつる

日もくれぬ木影やゝやゝにをぐらく御伴の人々もいつかちりちりに行きわかれて  
 あたりさびしくなりゆくに墓標の文字のみ夢のやうに浮き出でたるがそれもやが  
 て夕闇の中に消え行くわびしさよ

『稀にくる夜半もかなしき松風を絶えずや苔の下に聞くらん』とよみしも昔あは  
 れ同じ心に夫の君家の子たちのいかばかりおぼしまどひ給ふらむよ

あはれ吹く風も心して吹け落つる木の葉も心して落ちてよ

日も月もあはれ心してとこしへにこのかなしき刀自が御墓守を給へや

みわかれと玉申とれば袖ぬれて

仰ぐも悲し御柩の前

### 霞ヶ浦と香取

(上)

その朝は實に静かであつた昨日まで同じ講習をつゞけた齋藤、宮本、關川の諸氏と別れて茨城縣は阿波の河内支教會を四時に辭した  
 だら／＼と坂を上ると郵便局や呉服屋の前を通つて大杉神社の横を曲がる  
 町の助役といふのが浴衣での散歩それが大本教の研究者だとは同行の大竹氏の話  
 繁つた樹の間に足元を露にうるをはせし夏を知らぬ森を出るとばら／＼松のはへた山のあなたにやさしい阿波崎か影を湖水におとして小舟の二つ三つ見ゆるもう  
 れしい  
 うすい烟りを立てたかや葺屋根を見當てに曲り／＼た道を下り加減に二十町も来たであらうそれが船出しやうとする須賀津であつた

たくましい船頭は朝風に櫓をのやつて芦の葉音をあとに残して眠れるやうな霞ヶ浦に出るともう浮島はそこであつた  
 神代のまゝといひたい此島の上陸は珍なものと上つて見ると別段のかわりもなく  
 田畑連なり小山さへあつて戸數も三百戸と聞いては馬鹿にならず  
 鰻とりの老夫婦が船を止めてジャガ芋の總菜に朝飯するのを見るところも同じ浮世の風生死の海に浮島の名もふさわしいなど飛んだ悟りを開らいて元の船中の人となつた  
 風まちする帆かけ船や浚漕船やの間を通つて牛堀のなつかしい松山の下ゆくと千歳屋の棧橋お早いおつきと迎えられて佐原行の汽船はとさくと十時半ですとのこと  
 とに暫くは涼風をと樓上に休むことゝなつた

(下)

雑誌の投書家に高橋誠氏といふのがある牛堀の郵便局長であると大竹氏がいふ

ので訪問もと牛堀の町をゆくさみしくはあるが川港のことゝてそこらあたりの形ちがどこか珍らしい有名な漬物屋の前から二三軒先き右側に尋ねる郵便屋があつて向側に呉服店がある妻女とも見ゆる人が客を相手に頻りに品物を並べていられる標札に高橋誠とある處から訪問するとこれはしたり今日は行方支教會の月次祭とて一時間計り前に参りましたとのことそれは御熱心と先づ謝して來意を告げておいて町をぶらつくつと信徒の四五に行逢ふどうぞ茂木へお上りくださいと勧め方が切なものであるが豫定もあることゝて断つて千歳屋に小休したつめたい風が吹上げて来てこゝ千兩の値打ちある樓上もボウーのひゞきに久々で通運丸の特等客となる先客七八人せまい室が満員となつて折角仕入れた涼風も低い天井から來る暑さと満員とで臺なしになつた一時間で佐原に來るもう石上氏は逃すまじの非常線ともなはれて川口からゆく香

取に自動車が運轉せられるときいて俄かの野心停車場にかけつけ十二時發車に乗る往復五十八錢距離一里佐原町の幹道を外れて右に折れ香取街道に來ると櫻の馬場花の盛りはさこそと思はれる坂を上るとそこが香取町名物を賣る二三の家古い鳥居をくゞると神域さすがとやうなづく禮拜して杉の樹の間を眺望臺にゆく寒香亭が一番よい欄によると潮來は目の下で布をしいたやうな利根の巨流から津の宮の町は尾元に見える佐原宣教所で待受けらるゝことを思ふと長居は無用と又自動車を飛す香取神宮から佐原町まで十分とは早いものである小飯などいたゞき小時の講話を願ふて二時三十五分發の列車に佐原を辭して成田の繁昌をよそに印旛沼をながめ

手賀沼に迎えられて六時十分上野の人となる此行、吉田、大竹、石上諸氏に負ふ處が多い深く謝意を表する



### 斷腸の記

今宵もまた苦しきゆめはいたくわが心をおそひぬ  
語らんも憂し語るもつらし夢は五臓のわづらひとなむいへるも同じゆめいくたび  
か縁かへすはよまたゞごとにあらじかし  
われ親しき友がきも多けれど心してくるゝ人の曉の星よりも少なくてのみなの世  
やさしみの我身なるかな

正蓮山の鐘は静けき夜を破りて三つ打ちたるあとのひとつを長くひけり冬の夜の  
あけがたまだゆめ見むも苦しと煙草すればけむりのうちにありくのおきみの姿  
のわれを恨める目なざしの恐ろしくものいひたげの口のあたり紅のいろしたるぞ  
いとゞすごけれ

夜あけなば親しく訪ひて慰さめばやとそれのみ力とすればいつしか鳥の音のひゞきてあたりの車井戸かしましく往來の人の物語らふさへ聞えぬ

こゝちすぐくて朝おきいづれば身もすゞしくゆふべのゆめなごりなく消えて森のあなたより登る朝日の影こそいつになく尊とけれ

家の人にはそれと打明るゝよしもなく小川づたひにゆけばまだ起き出ぬ家も多くありけり

みちは霜さへふりけむあたりは白くゆるくけむる家のやすき夜やあけぬらむうらやましおきみの家はつゝみより左して槻の小高きがもとにありけり

こゝまでは相見てと思へる心のさすがその家居に近ければいたくこゝろはおびへて足さへすゝまず息ぐるしきこそあやしけれ

おきみは日頃五十といへどまだ五つ六つは若やぎて見ゆ

われうら若かりしときおきみと語らひて銚子の濱邊に貝拾ひし日や雨の利根は通運丸にしめやかに語らひし日のおもひでこそ今は夢なりけり

われおかせる罪ありてゆくべからざる處にゆきぬ心は荒びぬ身は汚れぬ再び世に出むたよりもなく亡びゆく夏のほたる火のそれよりもたよりなき身を助けしは今のおはななりけり

梅を櫻にとうつりし我心ならねど忘れがたきその真心に一年とたち二年と重ねればいとしのしさへ生れ出でゝこよなきものとなりぬ

おきみとて捨べき人にはあらじされどおはなの心とくらべてはさすが見劣りする

節のそこゝにあらわれてうとぶにあらねどわすれ捨てるにあらねごうつろひゆくぞ甲斐なけれ

されどわれ色香に迷ふ年は二昔となりてたゞにおきみを厭ふとはあらじかしいくたびか闇路におちしたのみなきわれをすくわれし道ありてさすがに人の道を日々におこなひすませば二人の妻はいとご罪深きものと悟らるゝこそおきみと別れんわれの深き心なりけり

ふたゝび語らへどおきみはいつもわびしの心よ心なの人よとかこちごととしていとませんときはおひ來りて迷執とにやあらん叫ぶ聲のうたゝ悲しく憐なることに近き頃より折々咯血して衰へゆくぞ悲しけれ

今日訪ふは三度び目なりかしありし日を思ひ出れば逢はんか又先の日のさまやく

りかへされん逢はずに歸らんか夜毎恐ろしのゆめを如何にせむ

われの今斯くためろふは真心なき爲ならむ語らばなど通せざるとむちうちし心はいつしかその家の人となれりけり

おきみは高枕してありけり肌寒き冬の夜を氷もてひやすらむあたりのとりちらしたる

先に見し日よりいたく衰へた頬骨の高く青ざめたる色のこの世の人と思へずあまりのことに枕邊にうちふしぬ涙しきりなく出で、頓に頭も上げがたし

七藏さん……やせ細りしおきみはかく我名を呼びぬいつになくやさしげなり

おきみかどわれもさらになつかしき心地してその名をよべり水を乞ふまゝに與ふれば二度三度咯血して枕のあたりから紅いとなりぬすごしともすごし家人等の驚きまどひてあれこれと清め胸のあたりは二つ三つの氷囊さへ用ひられしは物は

語りのならぬまで苦みぬ男なきにわれの袖は打しめり

やゝありておきみは虫の音もて七藏さん……今日こそは何ごともたもふな  
みなわがあやまりなりけりゆるさせたまへ日頃のおころさどらぬにあらねど花  
散りて木蔭に休るふ人なく折々に見む鏡には色なき風の身に泌してわれながらあ  
らそへぬ老の波

花あらばさそひ賜はむ香あらば捨て給ふまじとそれのみに恨のかずつもりて果て  
草枕病の床にさへ親しむ身とはなりぬされどいたまひし言の葉のあとつゆ恨む  
べきことにあらしとこゝろづきては今日は相見えて明日はおとづれてひめし心の底  
を語りて心を休めまつらむと日毎わするゝひまなけれど身の勞れぞすぐせのわざ  
なりけむかく惱めるまゝ身動きもならでもだゆる心をおししづめしは幾日ぞよく  
訪ひ給ひけり今はみこゝろのまゝに随ひて清く兄よ妹よと呼び交ふことになし玉

へや

あやまちゆるさせられとうちふるう細き手を合せて拜みぬ  
われなきぬ聲上げてなきぬ人の見る目もあらずきこえんも恥なし聲のかぎりをな  
けりおきみもなきぬ

かくてわれは清き妹を得たりけりわれの救はれし道は妹をも救はれてなやみ  
も薄らぎぬ苦しみもかるびぬ  
むすばれし胸の糸のあとかたなくとけて兄と清き妹の姿を小川の影におとして  
救ひの道に謝恩にどうれしげに歩みしは菜の花のさきそろひて村の社の森にまじ  
る一本櫻のあたり明るく蝶の羽風かるげにうかるゝ卯月の中旬なりけり

こは七藏主といへる人の昔語りをそのまゝにしるせしもの文に花なく筆に力  
なければ語られし節のあやまりはあらず七藏主といへるは素より假名にしてそ



の處もわざとおぼろげにせしは深くおもふ處あればなり

大正九年極月十八日

病床にて

不忍畔人識

○ 連華咲くひなの細道馳立て、車は行きぬ人は眠れり

○ 甲斐絹つる谷村の町の雨の朝來む人もなく店靜なり

### 腐腸空頭

△食をもとむる人は幸福である胃の健全を示しているそして満腹の快をもやがて得るのである

△膳に親します山海の珍味も甘くないのは病的であることは云ふまでもないがやがて肉細り體勞れて死の國へと急ぐのである

△権力や富やと過大視病にかゝりて朦朧とした心で終生を誤まる人はその病人ぢやないか

△酔ふたものは水を興へて醒むるを待つより仕方がない

△小なる富を得ると自己を過大視して仕末におへぬものが出来る

△川口邊の車夫は夜業を断り地方を他に譲り道程の短く賃金の多からんことのみ梶棒を握る

- △今の世に一幅の縮刷圖はこの車夫じやないか
- △人間は権力と富で最後まで光るものであらふかそれが適當なる食物であらうか
- △勞力を厭て成功を祈り目的を重大視してその道を破るしかも富の國に遊び權力の島を憧がる
- △誠は靈魂の糧ならずや然り正しき糧であるその糧を求めんとする絶叫の聲は何處にあるか
- △密雲彌が上に豊なる光明それいづれの日か仰がん



### 土屋作太郎氏をおもふ

十年振りでしたね私が高濱の棧橋に着きましたのは  
 おうせいで迎に來てくださった中であなが先立つて相生丸から上げる手廻りな  
 どの世話をしてくださつて折から汽車が出るといふ間際にあなたは連れてくる信  
 徒の切符を買ふ間に私の乗つた汽車はもふ發車しました  
 それでも愛媛でお目にかゝつてそれから平井へも海南へも御一處にいつてあなた  
 の教會へまゐる日は雨天で風がつよくとても信徒は集まるまいと考へていまし  
 たが案外に満堂の盛況で私は晝夜とも心よく勇んで講話を終りました  
 時間がありませんでしたので別府さんに私が御話し致しておりましたのをあなたは熱心  
 に聞いていおでになつたでせう  
 もう時間と私はあの狭い自動車の中にはいりましたそして此秋には本部の大祭に

お目にかゝれる又私も明年はどうかして松山へも来たいと考へていました  
 牛のほへるやうな響がしてゆるぎ出しました自動車の上から私はあなたを顧みま  
 した

それが此世のお別れとはどうまあ思ふたでせう

つゝましやかなあなたは車の方角を見て幾度かあいさつせられたが掘端から車が  
 曲つていつたのでもふ見えなくなりました

六月九日の電報はあなたをもう此世の方でないことを知らしました私はいくたび  
 見直したでせうどう考へても事實とは認められないのです

惜しいことをしました土屋さん私は長い手紙をかいてそれをあなたに上げる時は  
 一生懸命でしたごうか全治してもらいたいの一心でした心にあるだけは書いてあ  
 げました

それがあなたに手紙を上げる最終のものでした頼みない世とは申しながら實に果

敢ない次第です

それでもあなたの病因が山口縣へ布教の歸りときいて私は武士が戦場で命をおと  
 したのと同じだと喜びました

かゝつてどんなに苦しまれたでせう私は落涙を禁せずにおられません

それが愛媛からの通知によると就床してからもふ總てのことを大悟して神様へ無  
 理な願いをかけて呉れるなどの言葉があつたそうですね

いややうそれまで決心なされた私はそれを聞いて感じました

けれど土屋さん御安心なさいませ役員も親切です親教會もあります誰れも悪いや  
 うにはしますまい小兒衆の行くすへも皆が心配してごうにか安全な策も立ちませ  
 う

さらばでございませ神様の元へ歸らるゝあなたのおみたまを謹んで御送りいたし  
 ます

### 覚醒せよ授訓者諸君

○ 或る授訓者が事情あつていづんでいたけれど神様には一日といへど御詫びせぬ日がないそれがゆきづまつて身上のせまりさてこれからの心はどう定めたらとかういふ人を標準としてこのおはなしは成立つて見る方が幸ひにその心してくださればと願つておく

○ 私はおはなしの初めに「さあしあんこれから心いれかへてしあん定めんことにやいかんで」この聖歌をきいていたゞいておく

たいがい人は苦からのがれたい悩みから離れたいとしてもその道すじを違へて

いるなせなれば苦しんで来たり悩んできたりの心そのまゝで樂地を求めている水に溺れてぬれたくないのと同じ考へである今申した聖歌に何とある克くさとらしてもらはなくてはなりませんぞ

○ 私はその上に就てこんなことゝ思ふている

濁つたものがあるそこに清水をいれやうとすれば先づ泥水を捨てゝから澄んだ水をいれる我心のなやみくるしみも通つて来た其よごれた心も奇麗に「さんげ」して御論に基いたころ定めするから結構な思案も出るといふものまた思案がでもそのまゝでにおいては直打ちがない効果がないそれを確く行ふていつてこそ助けてもらふことができるのであつてこの聖歌はその邊をとくとおさとしてくだされた尊とい理である

元々授訓を運ばしてもらふ様になるには最初身の障りから段々のみちびき長い間  
 それからそれへと教へて漸く一人立のできたところから授訓の御許しとなるので教  
 へる親の身には大儀とも大層とも思はないまでも仕込まれる方では容易ならぬ高  
 恩と思はなければならぬ  
 即ち一名一人限りに仕立て、もらふた理を考へたら休むのいづむのと左様な支障  
 が湧き出るはずがない

○  
 ことに明治二十七年七月七日の刻限の御神言には

さづけといふたるさづけといふほどのくらいどれだけのものともたかさもねう  
 ちもわからん——おなじ理をだしてあるみな一手である  
 尊とい神様の御霊徳を先きの人にうつさしていたゞくのが授訓であるまた神様の  
 みこころにはどれも可愛子供へだてない一手一つにとくだされた授け一條である

一生を通じて清い助けの道を歩ましていたゞく上にはこの授訓はなくてならぬと  
 決心して運ばしてもらふた理である  
 それが何日何時と區切りつけずいつの間にか助け一條の尊とさも神様へのこころ  
 さだめも我身の行すへのいんねんの理も忘れともなく忘れて放心したやうにな  
 つたのは何の爲であらふか

○

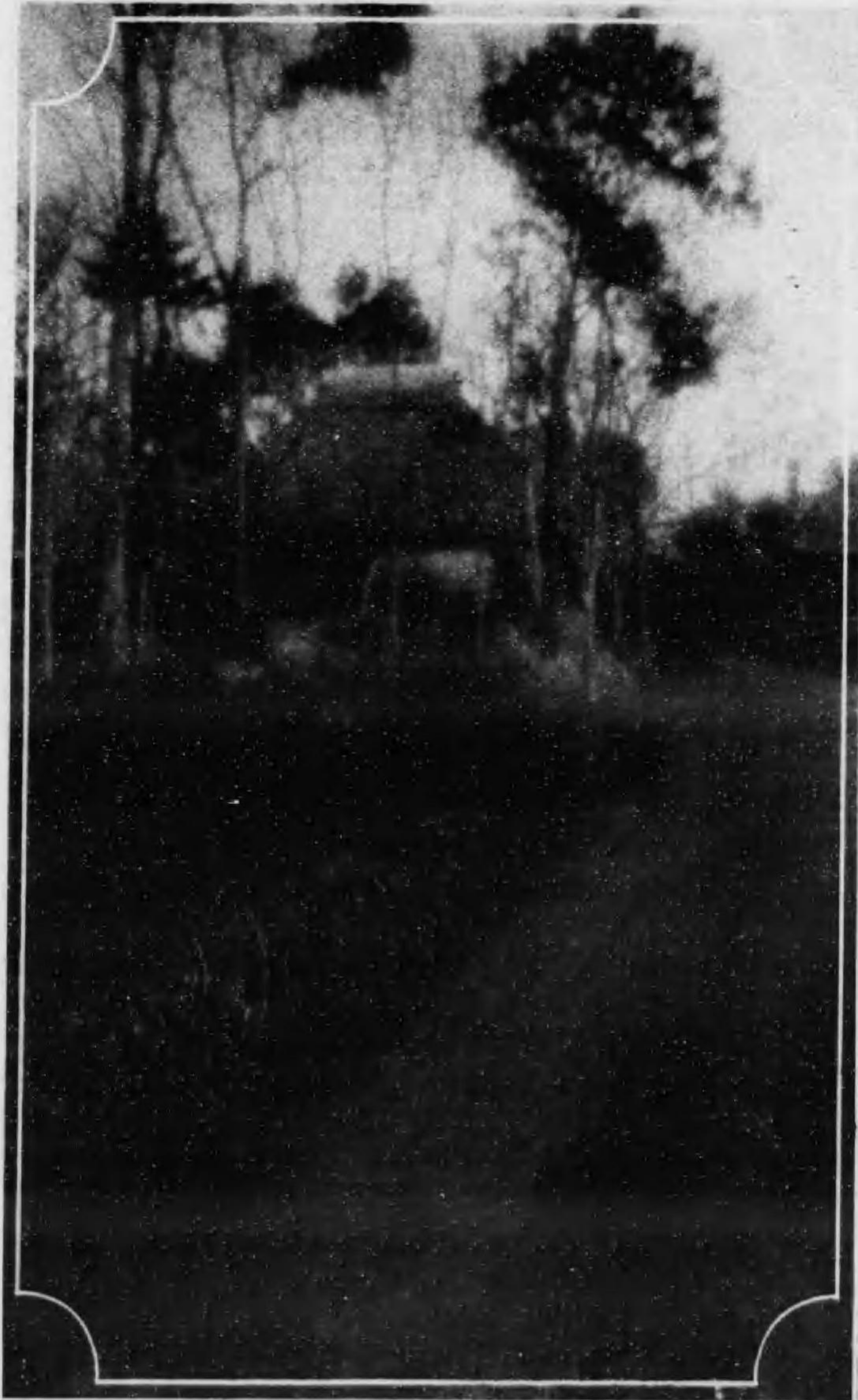
あちら此方を見ると消の上に働かしていたゞきたいの心あつても自由にならぬ人  
 もあるやるでなくやらぬでなく切れそうで切れず細々どつながつている人もある  
 まるで何もせぬ人もある授訓を忘れているのもある千差萬別この状態はどんな事  
 がさうさせるのであらふ  
 私も深く考へさしてもろた皆様方も世間を見るにつけてこのことは思案して、く  
 ださること、思ふそして私の考へではうけとるとき心の心がにちにちのこころこの

要諦を反省することが第一であると思ふ

呼び出されて神殿に待つ間また授訓處へと進んで先生方から心得をさとされた時それから進んでじき／＼に御神言を戴くとき其時は我身ありとはおもはず况んや家や財寶などは心にないそれでこそ萬の慾は去つて總て空唯あるものは「もつたいない」これだけである

○

萬事を捨てゝなやむ人病む者それははなるべからざる兄弟姉妹何も知らずに床の上のくるしみ人知れぬ煩悶それが爲にあたら長命をちいめ家庭に風波をおこし日々の勤めも怠り勝まだ涙の自由にこぼせるものは幸福でなみださへ乾上つてしもふた人々花は咲き鳥はうたひ雪よ月よと世は移つても我身ばかりはと悲嘆の絶えぬ憐れな人々それを救ひたい神様の御徳に依つて助けさしてもらひたいの一大決心



草のいのり

このころ

—1200—

要諦を反省することが第一であると思ふ

呼び出されて神殿に待つ間また授訓處へと進んで先生方から心得をさとされた時  
それから進んでいき／＼に御神言を戴くとき其時は我身ありとはおもはず況んや  
家や財寶などは心にないそれでこそ萬の慾は去つて總て空唯あるものは「もつた  
いない」これだけである

○

萬事を捨てゝなやむ人病む者それははなるべからざる兄弟姉妹何も知らずに床  
の上のくるしみ人知れぬ煩悶それが爲にあたら長命をちよめ家庭に風波をおこし  
日々の勤めも怠り勝まだ涙の自由にこぼせるものは幸福でなみださへ乾上つてし  
もふた人々花は咲き鳥はうたひ雪よ月よと世は移つても我身ばかりはと悲嘆の絶  
えぬ憐れな人々それを救ひたい神様の御徳に依つて助けさしてもらひたいの一大  
決心

それが授訓を戴く瞬間の「もつたいたい」があれやこれやにとうすれて行つて悲しみも人のことやと思ひなやみも他處のことやと冷やかにつまり元々の「我がかり」が復活して順々とはこりをかさねるかさねる丈け靈光の徳もうづもれつつしまいにはお道を休むといふ不思議な心がわき出てくるのである私はかう書いて来てそとろに冷汗を流さずにおけぬ

○  
暗から明みへ明みから元の暗への道それが明暗の區別もつかぬまで心がしびれてしもふたゆくすへはごうなる  
こゝに至つて切に感じるのは  
とふりよい道はとふりにくい道になるで  
これである

人間はあゝせくする内に此とふりよい道をさがしているそれを求めているけれど



其通りよいといふ道は我が心で作つて道ならぬ道であることに注意しなければならぬ所謂人間心の道であることを忘れてはならぬそれであればこそ次に來るものは通りにくい道となつて現れる蒔いた種である曲つた心の影である

○

心に浮ばしてもらふたことを茲まで書いて來た授訓者であつてそしていづんだ人その人は多少考へてくだされたこと、思ふせひ方針の建直しを望みたい私はちよつと短かい話をはさましてもらう

眞の助といふのは「己」を人に與へるにありとは説破した言葉である

或る處に退職士官が戦役の爲負傷して手當を願ひ出たそれには自分は夫婦の外に子供が十人ある戦争して右手は使へなくなつたから年金を下げてもらひたいとの意味が書いてあつた

事實かどうかと王様はそつと調べに行つた

折から夕飯時で汚れたテーブルの周圍に夫婦と十一人の子供が黒パンなどを餘念なくたべていた

王様は願書と子供と見くらべていた現在に十一人の子が數へられる書類には十人とある數へちがひかと何度もやつたが十一人に違ひない

其の時王様は靜かに屋内に進んで身分をいはず唯しらべに來たことだけを通じてさて十人とあるがこゝに十一人いられるそれは何んな譯であるかと問はれた

主人は御尤な御尋ぬでございませう何をかくしませう二十日計り以前この門口で夕方に子の泣き聲が致しますから出て見ますと八歳斗りの此の子が父に捨てられたと見えて頻りにそれを慕ふて悲鳴を上げております

世の中に子を捨てるのは克くよくのこと、突作に思ひまして兎も角もと我家に入れました在合した果實を與へますと傍に同じやうな私の子供もおりますのですぐとなつきました今では我子同様かうやつて食事一つにしております

かう述べて別段恩にきせがましいことは少しも言はない  
王はつくづくと感に堪えて言はるゝには

あなたは家族十二人の食物が乏しければこそ年金を願ひ出られたその不自由な  
中に人の子を育て、ゆくつまり自分の食物をへらして人の子に食さしてやる心  
は實に見上げたことじや今は何をかくさう私は此國の王である年金は愚かその  
他に特別の金も下げる安心してその子供を育て、やつてもらひたい  
と満足を現はして歸城せられた

短かいはなしはこれで了る

○

天地に充ち満ちた神のおめぐみそれを各人にいたゞかせるのは授訓者の一大任務  
である授訓者はおめぐみを掬ひ上げて「むねのわからぬ」その人々に與ふべき貴  
い勤めである

長い御歌は更に

それからは神のはたらきなにもかも

じゆうようじざいしてみせるでな

- 水車ゆるう廻りぬ人にさへは吉田の宿はこゝと答へぬ
- 鐘懸の松も枯れゆく驛やさみしくひびく馬車の音哉
- 山姫の足洗らうさや川口の湖清く水深くして

### 腐腸空頭

#### ▲講社まわり

今の神社が氏子と其祭禮の日だけで其他には参拜に来るものさへないのは不都合だ又神社の威厳にも關すると頻きりに接近策をやつてゐる社司社掌がかどうのころのは我々はいはぬ

昔し米國の或る教會でヘンリーといふ人が成功した秘訣といふものがある頗る平凡なものであるが實行難だ

その人が在職四十五年間に信徒を訪問した數が二萬五千三百九十七回とのことである忠實な仕方である

本教では別して講社まわりをよくするのが長所で期せずして同一である運べくと教會へ運ばすと共にその講社の家にも運んで夫婦中や親子中を調和す

ることが熱心家をこしらへる基である

#### ▲おさとし

人に諭をするのに二色ある是ですると目的を教へる人と目的を教へてその道すじをも親切にいふてくれる人とある

迷ふた心や意氣を失なふた心では行先を教へてもらふただけでは仕方がない臚るげながらも目的は忘れていない唯力がぬけて爲さんやうがないのだ道すじを教へてあぐることが肝要と思ふ

#### ▲おたすけ

昔し千束町に村井彌助といふ方があつて非常な大患であつた明治廿年頃であるから今のお助けと一段違つて枕元で神樂勤もしたその人の家内が庭の井戸で水をあびる我々もあびる時は十一月の下旬初冬の空は随分寒じたものだ  
けれごさむいともつめたいとも思はぬ

どうぞ本人をおたすけくださいの一念はあらゆる雑念を祓ふて祈願の他に一物も  
もない

醫師はいやです死んだら診断書を書いて呉れますから心配はありませんどうか一  
心に願ふてください

いくら勧めても醫師は嫌ひの一天張その内に吐く瀉すで實に寒心せずいられぬ  
その翌日もその又翌日も三日三夜

それでも本人の一心と側の一心はとうとうさしもの大患もけろりとしてお蔭様  
でと老體益々健全となつた

よく行届くやうになつた今日は批難の聲を他から聞かぬこれだけ世の中と同化し  
て反て眞の精神を失ふてしもふているのじやないか批難は素より好まない併し無  
意味の好評は批難より悪くはあるまいか

▲午砲と時計屋

或る國で午砲を打つので標準はと聞くと向ふの時計屋の時計だとい  
時計屋で正確な時間をきくと午砲だといふ双方のいづれか一つ間違へば両方ど

もまちがふ當てにならぬとの笑話がある教へるといふことの責任の重いことがこ  
れで知れる出所も明らかでないことを説教に云ふたり人に最もらしく聴かしたり  
聴た人が他へ傳へたりして飛んだ誤解を來たす諺にいふ一疋の犬が狂へば千疋  
ど

▲どりこし苦勞

どりこし苦勞といふものがある落つつくと馬鹿なことをしたと我心をあざけるが  
止められないものと見へる

電車に乗つて隣りの人の足を誤つて踏むそれと見て向側の人がいたがるその人が  
どりこし苦勞だ

▲ひげ

このこゝろ

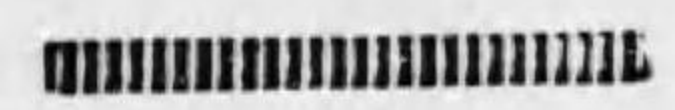
顔の造作も必要とあつて當今はひげが多くなつた醫師と宗教家は人をなつかせるものでひげは無用との説もある或る本にひげの種類が書いてある  
 ひげは秀毛である唇の上にあるを「カミツヒゲ」といひ頤にあるを「シモツヒゲ」といふ髭はウハヒゲ鬚はホ、ヒゲ鬚はシタヒゲに當るとのこと  
 ひげのない記者などはこんなことは無用である



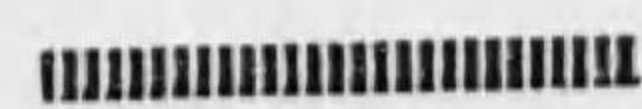
若き人の身退りければ

○ 朝の日は斜に照りて床近し汝は病をいかにくるしむ  
 ○ 電車行き汽車は走りて音響の絶ゆる間もなきこの岡邊よ  
 ○ 半剃の頭さみしく氷囊のにじむ露こそ汝の涙か  
 ○ 月出れば人も集へり夜明けても看護盡せりあはれ苦痛よ  
 ○ 効みえず年二十六文月の十九日こそ汝の一期か

○  
汝去つて月下鹿鳴の聲きかず龍笛一管机上にむなし



しま人の語ろふ聲のきこゆなり  
波は靜に船はゆたかに  
鹿島やゆき、もたえしおぼる夜に  
月やこふらんさを鹿のなく



閑談

昔しの話を開かせと云はれるのか今宵は幸ひ訪ひ來る人もあるまい爐の傍で  
茶もふさはしいかびくさいと捨てゝはなりませんぞよ  
此頃は大天理教といふものが生れて來たそれは系統に關せぬ上からの言である  
のこどじや時代はそんな事を言ふまでに進んだ真によいことである  
然しそゆう立場から見ると昔のことは皆ケナして一笑に附してゐる何ぞ心得違  
のこどじやないか成程昔のことでもわるいことは改めてゆくは至當であるが片鱗  
を見て龍の全體は知りやうがない皆までも調へず獨り賢がつてあれもこれもど  
ケナすのはたしかに心得違である  
例を擧げると一戸の信徒を爭論してとりやりをした頃を幼稚だ無暴だともいふて  
いる今から見るとさう思へやう

然しその頃の布教する人の精神と今時の人とはとほど違つてゐる又講社結成の難易も同日の論でない

殆んど雁境にある今日からいへば一戸の信徒結成はさまで苦勞のものであるまい及ばない節があつたら上級は近い先生は多いから如何にも完備はしたが昔は御授のある人が珍らしい位でその人が他の先生といふても近所にな

熱心に助け一條の爲には四方の非難攻撃を物ともせずそれは戰場に臨むやうな覺悟で血眼にやつたものである

所謂得難かつたものを漸く得るといふので一戸の信徒でも容易なことじやない系統を争ふのも惜しむのも更々無理からぬことであつた

今日はそれほどまでなくとも信徒は得られる易く得たから軽く扱ふ意味からとりやりも無くなつたのではないが多少それも交つておるとおもふ

所謂天理教の新人も今日あることを知つて昔を重んじないと花の天理教枝の天理

教を扱ふやうなことがあつてはゆゝしい事である

新人は何そんな古臭い老人は隠居して居れと一喝を喰はすであらう老人もそれは承知よく喰はしてくれた其意氣がうれしいと呵々大笑するじや

基督教も佛教も分派する所以は美しくしい教義上の意見は少くて人の爲にする事が多いやうに聞いてゐるこれは由々しい問題であるから軽い口はきけぬが人の爲や金の爲に利益の衝突なごからでは俗人濟度は愚か自分の地獄落ちがわかるまい理窟ばなしはいやじや何か珍らしい助け一條のことをきかせと老人とかく頑固で處世がへたで毎度く口で間違をこしらへたり人にさらはれて親切な人から注告を受けたことが何度もあるいや追々におどなくならうよそんな故でつい横町へ話

が飛んでゆく

ひとつこゝに聽せることがあるまあ溢茶一杯とやらう

一度聴かせるもよからう

松旭齋天一が御地場へ御参拜したので其感想はときいたことがあつた厚い座蒲團の上で天一はかう語つた

神さんは結構でしたけれど参拜している人に一人も賢こさうな人が見えないのと立派な着物の人とがないのは落膽しました

かういふじやないか湯氣の立つた新しい信者は天一のみでなく皆さう思ふであらう然しさう思はしておくと信仰の妨げとなると考へて

能くそれだけ見てくれましたけれど天理教の人は質素で身なりを装はないアカの附かぬやうにして木綿で満足してゐる粗末な形だから貧乏人と即断しては大

間違である教義上のさとりから來てゐるのであつて賢こさうでないのは愆にはなれてひのきしんの精神が充實してゐるからじや人の物をたゞとらうの心があ

ると恐ろしいまで油断のない目付してゐるが何事にも満足して世の爲人の爲に

働かしてもらいたいの精神であるからでつまり天理教卒業の證券である  
かう私はいふておいた

君などはまだく賢こい顔じやろと考へたらよからう  
世の中は益々むづかしうなる又むづかしくすると云ふ事も段々わからなくなるけ

れど眞理は一也で眞はかはりない  
もう歸るとまあいゝじやないか田舎からもちうた餅でも焼かうそんなものはいや

じやとこれはごあいさつ恐れ入るその内においでこんどはまとまつた話を調べて  
おかう寒い夜じや用心しておいでよ





### 擬高野夫婦來狀

私共夫婦存生中は色々御厄介に預りまして死後尙一本の碑に二人の名を連ねられまして御厚志を深く感謝致す次第に候

一別以來時々御通信も申上度候へ共何分現世とは諸事を異に致し候まゝ今日迄御無沙汰申上候實は秋山氏や其他懇意の人が追々参り候に付其都度大澤分教會の状況を承はり悲嘆の涙を不禁我々夫婦袖の干く暇も無之候存生中は力限り御道の爲にと努力仕候心得なれど白事意の如く行はれず家内に死なれ直ちに其後を慕ひ戀しき現世を離れ候次第にて今更誰彼を恨む筋の者でなく唯々我々夫婦の不行を屈ざんげ後悔罷在候

愛子のぶ子も今以て獨身にて罷在候趣これは強て修養を積み品行を慎み將來は大澤分教會の爲に女ながらも大努力すべき筋合を自覺し日々無怠教義講究致候

### はば満足致候

親子の情に溺れて不思のぶ子の事を申上候が夫れは一小事にして大澤分教會の現在の形にてはいくら墓所を清められ折々の年祭を執行被下候ても我々夫婦は喜んで其祭を享けるに苦しみ申候

牛重の壯麗なる建築は部内として大手柄と日夜喜悅罷在候が部屬の一教會でさへあの位の普請も爲し得らるゝものを親教會として見苦しき現在を繼續致すことは實際残念に御座候

志木の 大澤氏も参り候て共々物語り居候同宣教所も伴の若い割合には奔走を眞面目に致し候故當今は左したる効績も見え難く候も追々は同教會も今少し便宜な處に移轉して一層發展は爲し得られ候事と奉存候

粕壁は此頃に至り大に面目を改められ候事祝着至極に候

青木氏以來の古い教會なれば今一入實を込め盡力被下天晴大澤分教會の片腕とな

られ候様祈居候

今上の榊田氏に就ては苦心を休めたる事無之候相當の人物でありながら決断力さへあれば何日迄もあの姿にあるまじく牛重粕壁と双んで大澤の大原動力となること左して難き仕事にあるまじく返すくも同氏の果断的男性的行爲を希望仕候栗原氏も中井氏も取る年には致し方なきものと見え目切弱られ候由旁益々心細き感の絶え間之無候

大澤のステーションも武州大澤と改められ乗降客の八分迄越ヶ谷に奪はれ一個の寒驛と化し候事如何にも町の爲殘念に存候我々夫婦も度々御通信致兼候事なれば今後又何日になりて御手紙差上候哉難計故縁言ながら申添候

どうぞ小阪さんや藤原さんや榊田大澤のお二人さんこの四人の方が一つ心ご成つて大澤分教會の爲めに必死の覺悟被下現在の衰勢を挽回して奥州街道大澤宿の一名物に數へられる迄に御奔走偏に御願申上候

自由になるものならばせめて一言だけなりとも直々申上度候へ共夫れも叶はぬ身の悲しさ何卒我々夫婦の微志を御推量被下天理の御道は勇んで働らかしてもらう事できどいていづむやり方は大間違である事を徹底的覺醒被下候様伏て希上候

書きたい事は山々在れど御許しの時間も近づき候まゝ惜しき筆を擱き候

故 高野柳藏  
故 同 さと

なつかしき

大澤分教會部内

各位御中様

### 江戸川清談

私は極月のはじめ流行性感冒にかゝつて少からぬ惱みを受けた雪の降つた翌日古田老人が見まはれてあなたには種々お世話になります。今日は私しの一番嬉しかつた話しを致しますと物語られたのがこれである。編中私しとあるのは即ち古田老人と思ふて下さい。

うぶ聲

江戸川終點と申しますると日毎夜毎に人の山で新開の町から買出しに来る奥様娘。さては下女たちで夜分は人通りもならぬくらいでございます。早稲田に開通しましても繁昌はいせんといたしております。私しが御道を初めさして頂きました時は明治二十年で小石川水道町の西の端に居りました。其項は今こそ江戸川終點にうばはれた繁榮をそつくりこの小日向水道町が持つて居つたのでございます。

さて釣ばり用の手明ながらお助一條にをいがけ其れがだん／＼とふえてまいりましてどこか新築をしたいと云ふ世話人が出来まして集り／＼相談を致しますが思ふ様にはまいりませんでした。

水の淀み

此の頃に士族で大野定三さんと云ふ人が在りまして其人のわきの下に橙大のおできが出来ました。其れが出来處がわるいとこの事で下手な手術をすると命取りと云はれて其母人はかはいい一人息の一大事と始めて信仰に入られました。それで私しも極力神様へ御願していろいろ論しもいたしましたが一兩日なんのしるしもございませぬ所がふと心付きました。事が在るので秘密に金をもつてゐて明くれやり場にこまつている事がないかと論しておきました。

未だ明治二十三年頃で貯金の機關も完備はしておりませんので女心の常と持つてゐるも心配預けるのも心配と五百圓の金で苦勞をしていましたのでこれはい

つその事神様の御宮を立て、頂く事に使ふて頂きたいと申し出ました其が元で牛込區西五軒町へ牛込支教會を新設して始めて祭儀や説教を公にする事が出来ました其の喜びはとても忘れられるものではございません定三さんも早速の守護で腫物もきれいに助かりました

御館 なりて

その喜びもわづか一二年で毎かいの説教月次祭などに集る人がはいりきれなくなりましたもちつと大きなもの、新設と云ふ聲があちらこちらで立ちはじめました板橋の講社で荒尾さんと云ふのが牛込水道町の片屋敷へ元小石川警察の後三百七十六坪を月十圓で貸してあげましよふと云ふお話しが出来てさあ困りましたのが金さんだん

誠にごむりな事ではあるがと本郷は菊坂荒尾さんのお宅へ上りて千七百圓拜借と一途に出かけましたが主人が遠國へ御出張の不在でどふともしよふがないので何

處をごふ歩きましたか無意識にたぐさう稻荷から小石川武島町迄まいりました其時私しは強い腹痛を感じました歩む事も出来ませんので虫のはう様に塚や壁や植木などを手さぐりに漸く江戸川の中の橋迄たどり付きました

菊坂のなやみ

心ちよい江戸川の清流も目にはいりませんで橋のたもとに私しは無念無想其れから一心に神様へお願しました今荒尾へ行つて相談が出来なかつたので落膽はした其まへにしないで今度は四谷の山本茂衛門さんへたのみに行かふと思ひまして私しの腹痛が其事情でございましたら唯今橋を渡り切る迄に御守護を願ひまするところ願ひましたすると不思議にきれいにお助けを頂きました

かたき礎

もう私しは大丈夫大安心と宙を飛んで五軒町へかへりましたすると教會では私しの歸りましたのを見て金が出来たか何うかをせめよせてまいりますからもう

安心しなされ金は出来た四五人で一所に四谷大木戸の山本さん迄行きましよふと  
 こう申しましたすると中に案じ深いのがありまして山本さんと何時逢ふて約束し  
 てきたかとかう聞きますから私しは荒尾の事や腹痛の事や心定めの上御助け  
 頂いたことをくわしく御話しいたしましたので元氣旺盛に五丁の人力は堀端から  
 市ヶ谷見付富久町から新宿二丁目大木戸の山本と云ふ足袋やへ止まりました足袋  
 やでは何事と驚ろいて居つたでありますよふが座敷へ通されました来意はと主人  
 から問はれまして一千七百圓三ヶ年無利息で貸してもらひたいと申してなほ材木  
 や大工へはそれを三度に切つて渡す事迄申しのべました山本方でも突然で一時に  
 はまとまらないで三度なればどの事に心よく承知せられて牛込支教會の再新築の  
 基礎は安全に成立しました  
 今高田の馬場に在りますのは全部其建物を移轉いたしたのです

あわれれ其子等

父の墓を拜がむ子等のかたわらに母の奥都城まだ新たなり

日毎来て泣く聲すれば草かげの父も泣かなむ母もむせばん

雨ふれば父おもふらむ風ふけば母慕ふらむあはれ其子等

紋附の木綿羽織もなつかしきかたみとなりぬ裏は破れて

かくりよに亡き妻あれど現世に心ひかれて靈魂はいつくぞ

### 腐腸空頭

○ 自分じぶんは或時あるとき柄がにない空想くうそうをした若もし此世このよの中なかの人ひとで働はたらいて食くはふとしてい人ひとと働はたらかないで食くはふとしてい人ひとと何なにれが多おほいかそれから早はやく働はたらきを止やめて安樂あんらくにならふとするものど一せう生働はたらきをしていものとは差さがどれほどあるか  
 ○ 明あきらかに之これが知しり得えらるゝならば總すべての問題もだいは解決かいけつせらるゝであらふと

強しいられて働はたららく人ひとは働はたらきたくない人ひとで食しょくがあれば遊あそばふとする部ぶである  
 胃いの缺けつ乏はふが働はたらきを強しゆる仲なか間は迅じゆん速そくの結果けつぐわを要よするから不正ふせい手段しゆだんに出でるもの多おほい  
 陸上りくじやうに居ゐた鯨くじは四足そくもあつたが怠なまけものゝ本ほん性せいを現あらはして水みづに住すむやうになつて

四足そくがなくなつた  
 働はたらかずに食くわふとする人ひとの戒いましめであると思おもふ

○ 早はやく働はたららきを止やめて安樂あんらくの園そのに遊あそばうとするものも一しゆ種くじの鯨この子分こぶんとしなければならぬ遊あそびたかつた爲たの勞働らうどうの銀粧ぎんせうであるから

○ 世よの中なかに働はたらかずに食くへるといふ時ときが來きたとして考かんへる  
 腦のうは中氣病ちゆうきびやうのそれの如ごとく胃いは夏なつの飴あめの如ごとく腸ちやうはもつれた糸いとの如ごとく四肢ししは縮少しゆくせうして漸あやく根趾こんしを止とどむるのみであらふ

○ 正邪せいじやを語かたらぬ口くちと美醜びしゆう別わかちなき眼まなことは唯存たゞそんざい在ざいを示しめすのみである

怠けるは減少する意である進んでは根絶するに至る

○ 働かずに食ふ人は怠である世の寶を食ひ減し遣ひ減しする若しその人ばかりでは人間の存在もなくなる譯だ

○ そして遊びたがる人や安樂を追ひ廻す人それを又強奪する人更にそれを利用する人が多いとすると足元御用心と來ている

○ 生成化育は神明の原動力であつて無始無終である修理固成は人の勤であつて奉公義務である

○ 愛國の至誠なく明倫の何ものたるを知らず飽衣暖食を以て事に臨むものは日本人

士でない宜しく鯨の弟子入を急ぐべしである

- おごそかの雲移しに皆泣きぬ君坐さずして道知らずとや
- 電車ゆき自動車走る中野町に君の華儀は静々さゆく

### 故柴田先生

靈岸島東港町の京橋支教會で柴田先生の十日祭を了つて役員に後任教會長の決定相談が熟して合息豊藏氏を擧げることになつてホツト重荷をおろしたのが一月十三日河風寒い日の午後四時である

勿論衰弱はしておられたが十日祭を一月早々仕へるなどは夢にもなかつた

定なの世である頼ない身である私は永代から電車にゆられて本所深川をぞう走つてたか知らなかつたそれはありし當時を偲ぶと思出の限りなく湧いて来て吾妻橋の聲に驚いて乗換した夜にいつても強い北風に時々警鐘が耳に入つてねつかれさうもない

いでや思ひ出のまゝをどペンに親しみ初めた

今の中橋廣小路から東仲通りへ出るとそこが大鋸町で柴田先生の住居であつた

力屋根の二階屋で店は落間で機械が据へられていた

近所には髪結のお浪さん高島さんなどがありて日京講社の講元であつた

間もなく日本橋の方は南小田原町や平松町などに寄所を設けることになつて當然京橋講社といふことになつた

それは明治二十一年の話である

戸張榭原飯田安藤などいふ方々があつた戸張さんは西仲通りで下駄商榭原さんは櫻田本郷町で小間物や屋號は結綿屋とおもふた飯田さんは川口町で安藤さんは八丁堀であつたその外に前田といふ方もあつて白木屋の品々行商していた

いづれも京橋講社の強武者で先生の兩腕である

こんな人が集まつて明治廿五年靈岸島長崎町一丁目京橋支教會を設けて一盛一衰はあつたが今日の隆盛の基礎を定められた物變り星遷つてお浪さんや飯田さんや前田さんなどは過去の人となつて役員の内にも稀衰は免れないで幸不幸の人も



現れて安藤さんは銚子に轉住し戸張さんは月島に移つてしまわれた  
 中興の人でそして今日の土臺となつてゐるのは齋藤春本大江岡田川島小幡その他  
 指を屈するに違がないそして最初から今日に通じてすこしも變りないのは鶴川さ  
 んである

柴田先生の周囲にはこんな人々が艱難を共にして力となられた事は蔽ふべからざ  
 る事實であるそして確かに先生は將に將たる人であつたことを裏書せられる私  
 は餘り立入つたことは知らぬが明治十八年吐血の爲に荷なわれてザルヤ横町の寄  
 所で御助けをいたゞかれたのが最初である天理教會本部設置の時も大教會の普請  
 の時も随分骨を折られたことは見ている

巡教にも同行した殊に海山三白里愛媛縣迄も同行した  
 道後の奥に石手寺といふのがある門前に乞食の人が列を爲している先生は一々施  
 與せられるのを愛媛の が見て柴田さんは教理を説くだけじやない實行の人と深

く敬服した美談もある

噴橋に宣教所を設けてあることや先生の三女は良縁にあることや一男の方が芝で  
 吉野姓となつて支教會長であることや皆人の知つてゐる處である

酒は嫌ひであつたが煙草は好まれてそれも晩年はやめられた  
 道樂としては圍碁であらふが餘り上手の方じやない

親切でやさしくて能く人の世話をしられた

それがもう幽冥の人となつて顯幽の隔りができて再び相見ることができぬ

私は葬儀の立派なそして銘旗に贈權少教正とあることなどは誠に満足したが獨り  
 京橋分教會長の肩書ができなかつたことを現在の京橋の役員さん達と共に深く遺  
 憾に思ふて止まない

けれど未亡人も健康が勝れている後任となる豊藏氏も勤勉家である上に役員が揃  
 ふている

なんでも一致和合して努力せられたならば名譽ある分教會に改稱せられるのもさして遠くあるまい  
 その奉告祭の時に初めて先生の靈は會心の笑をせられるであらふ (大正九年一月十四日午前二時記)



公 開 状

粕壁支教會長に呈す

藤原さん

あなたの教會を東武線粕壁驛に停車した車窓から拜すると何といふ立派でせう東武の沿線には教會も數ありますが實に随一といつていひでせう惜しいことに町から數丁隔つてあることです

○

藤原さん

私に少し昔語りをさしてください  
 まだ陸羽街道に汽車の影もない時代僅かに鐵道馬車が通つていた時分でせう粕壁附近は非常のひでりで皆枯れ果てゝもふ一雨なければ一粒の米もどれぬ恐ろしい

時がありました  
雨乞ひの聲は諸々に起りました私は若氣の勢ひてそれを神明に祈る爲に粕壁に集つた

事の順序として町長を總代として列座させやうと計つて町長の不承諾から甚だしき申譯のない始末で雨乞さへも願はれず歸京したことがありました  
時の會長青木島藏さんも大層残念がられてあつたことも覚えております

○

藤原さん

その頃は理事を勤めていられたでせうその後教會の形勢日に非なりで所謂經營難がつゞいて會長も事故あつて隠退した形ちであなたの努力は非常なものでした  
米國に居る舍弟から百圓の金を送つて來たものを惜しげもなく借金に拂ふといふ悲壯な時代をつくづくと考へ出さずに居られません

青木さんが死亡して會長の職をあなたが受けてからも今日迄はそれこそ細道いばら道がつゞいて並たいいでないことを知つています

○

此頃祭典があつて参列の人から聞きますと十數年振の盛大であつた粕壁もこれから發展しませうといふことを私ははざれほど嬉しく感じたでせう  
粕壁だから粕ばかりだ昔は春日部といふたからその春日部と改稱したいの嘆聲を洩らしたこともあなたは覚えてゐる筈です名は何でも實があれば盛大になるでせう

○

藤原さん

私は茲で擱筆したいのですけれどどうも續けずにおけぬ事がありますもう少しベンを走らしてください

元が定まれば、校も築える理で、粕壁が盛大になれば、部内の宣教所もよくなりませう。然しながら、それで安閑とできない状態にありはしますまいか。現在の宣教所の有様は、私はどこがどうと、々名指はしません。が修理を急ぐ個所が多くあることは事実です。そして私はその修理に當つてくださるあなたの心に一つの希望があります。別段こゝといふ空な心を遣はれた日もありません。まいが私の希望は貧苦の中に、舍弟から来た百圓を他に使ひ道もあるものを奇麗にお道の爲に使はれたその氣高い美くしい心で、部属教會を修理してもらひたいのです。

○

藤原さん

世の中の人は大層あなたを酒好みと申します。いやそんな時代もあつたでせう。けれ



とあ の ば ち お

○ 最近のあなたは昔の定規で計れない充分覺醒したあなたを私は認めています世の人は昔のことを今にもあるやうにいふのでせう耳にいれるに足りません

○ もふ愛兒達も成人せられて家庭は精神的に豊かに成つたでせう長い道中みちすがら冬の長夜に眠れないこともあつたでせう  
○ お互ひに苦勞を多くするだけ神様へ忠義です  
○ どうか早く部内を修理して大澤分教會の立派な片腕となつてください

○ 宗教局から巡回せられた渡邊屬官に舌をまかしたほどあなたは度量があるのです  
○ 一度決心ができたら他の人の及ばない勇氣はあなたに備はつていますその勇氣は他から起しにくるのでなくて只管あなたの覺醒が肝要なのです

藤原さん

人間はいつまでも働けるものじやありません覺醒の時に死が近付いているやうではなりません私は切に速かな助力をあなたに希望して止みません  
露骨な申し方は筆の廻らぬのと御心易き爲と思ふて戴きませう

鐘懸の松も枯れゆく裾野路さみしゆうひ々、馬車の音哉

山姫の足あらふさや川口の湖清く水深くして

かひなきやむらかり起る雲の内に富士はかくれて雨しきりなり

### 木枯しの夜

木枯し吹荒ぶ十二月の六日

こゝ草加驛に

君と相見しは其朝なりし

されど眼病る君は

みにくさを眼鏡に蔽ひて

すゝまぬ歩みに

こゝろざす家やいづこ

登る朝日にいらかを光らせ  
いかめしき家造りは

往くさ歸るさの旅人を  
 驚かせたる武里の村に  
 豊なりし君も今日は飢に泣く  
 財あれば人集まり  
 財つくれば人散す  
 世態人情紙よりも薄し

小やかな家庭を  
 本所につくりし君は  
 こゝも禍害交々にして  
 安住の處ならざりし  
 重なる苦しみに心氣衰るへ

家計窮して身又病む  
 天廣しと雖ゆくに道なく  
 地深しと雖樂土なし

急行列車は通過せり  
 驛はしづかなる竹の塚  
 下りの貨車ホームに入る  
 すは轢死の聲は闇を破つて  
 驛員右往左往  
 無惨なる君はその二列車の  
 車輪のさびとなり了れり  
 木枯こゑなく大地黙す

尋ねし人はあらず  
 助けを乞ひて成らず  
 骨をも徹す寒風は  
 君の熱き涙を氷らせり  
 祓へども妄執去らず  
 空飛ぶ鳥もねぐらあり  
 今は身を安むる何處ぞ  
 恥多き我身よと  
 さても淺間しき極みの標死  
 ほど近きくさむらに

君が無二の力たりし  
 櫻の細杖  
 あはれ竹の塚の驛  
 霜冴えてうらがなしき  
 向野初造君の靈は  
 いづくをさまよふらむ  
 夜氣陰々鐵軌白く  
 黒煙去つて響遠し



# 困難に打勝てよ

(某會講話大要)

あなた方の前には多大の艱難があるではございませんか覺悟はどうかあるのです

△ 教會長の神上られたあとが一般に荒れてゐますのをどう回復を計られるのですか

△ 私は私の信じてゐることを申しませう先づ今日の苦みは明日も苦しみであるといふことを第一にしりたい

△ 稍ともすると弱いあなた方の心はむづかしい事や骨の折れることを後に明日にこ

の延ばすことがわるいのです

△ 今日けふの苦くるを明日あすにのばして輕減けいげんせられる道理だうりがないじやあかりませんか

△ それから見るもの聞くものに絶望ぜつぼうすることですそれが其物そのものがだれが見ても不可能ふかのうならば絶望ぜつぼうも無理むりのないことと申しませうが心氣しんきのゆるんだ所謂いはゆる神經衰弱しんけいすいじやくのもので驚き易おどろい心こころからの絶望ぜつぼうですから病的びじてきどでも申しませうか

△ 絶望ぜつぼうは半ば死ししたる人ひとのすることですあなた方がなさることじや在りませぬ

△ 前途ぜんとによしや山のやうな苦みくるしや難儀なんぎがあるとしても私はそれに打勝うちかつ道みちが必ずあると信じます

△  
 男らしく働くことです百の障害を排して最も男らしく働らくにあるのです眞面目にやるのです

△  
 愚痴や不足は男らしい男のいふことじゃありません

△  
 眞面目の努力には神の力が添ひますおたすけがあるのです神の力が添ふて成らん  
 ことがありませうか

△  
 神の力をたのみにならぬとまであなた方は弱つておゐでになりますまい

△  
 長い雨天も時が来れば晴れやかな天気となります沈みきつた気分のもすると肩

で呼吸するやうな教會も美しくしい合せた力とそして神の守護があつたらきつと陽氣なものとかかります勤めてください働らいてください



### 暗い影が我を追ふ

暗い影が我を追ふ——おまへは何處から來たのだ名は何といふのだそして私に用事は何じやと聞いても無言

暗い影が我を追ふ——てもうるさい影だ目の前や心の内さては夢にまでも追ふてくる放れやうと急げばうるさく附いてくる

暗い影が我を追ふ——花に一日を忘れやうとする日も月にひと夜をすごさうとする時もごうしてさうまあ附いてくるのかこまるしやないか

暗い影が我を追ふ聖壇に人を教化する場合はその影が彌々大きく濃くなる周囲の状態がうすれて聴衆がだん／＼消えて終には暗い影と向ひ合はせになるその時のもふ自分さへ吞まれてしまひさうだ

暗い影が我を追ふ——峨々たる山の鳥も通はぬ奥や人さへ住まぬ沖の小島へでも

ゆきませうと影はさゝやく

暗い影が我を追ふ——救はせ給へ導き給へとの祈念を影はせゝら笑ひしてゐた

暗い影が我を追ふ——一閃萬里一聲の霹靂風を起し雲をよぶ影はくだかれて姿も止のぬ天に聲あつて——通つた道——

狭くるしい世の中は廣くなつたにくかりし人も慕はしくなつた神の御稜威のあらたかなことは深く肝銘した——暗い影がわれと放れた——

「つゞくくさ人扱ひのむづかしい苦るしいこそが身に沁みて來た」

あなたの教會にこんな

ことは在りませんか

- (1) 自分の教會がこゝにあるから他所から近所へ設置しられることがない競争者はない大丈夫なものだと儉安な心
- (2) あなたの家族にお道を信じないものはありませんか又信じさせるやうな喜き行ひができませんものはありませんか所謂家内が不調合じやありませんか
- (3) 教會所も物價が高くなつて維持に困る不安でならないとそろ／＼副業をはじめてその方に心をとられて大切な布教がおるすに成りませんか
- (4) 若いものは他の仕事して老人の方にお道を任して隠居仕事のやうな所長さんは居りませんか
- (5) 説く御神徳と信じる御神徳とが別々になつて人に強いことをいふても自分は何

となく心細いやうな氣もちがして神様の光をうすく感じるやうな事はしないで  
せうか

- (6) 年中自分の教會より他へ出ないで一人考へ斗りやつて他所が盛大になつたことも熱心な布教師の殖えたことも知らずばんやり夢のやうな生活はしていないで  
せうか

- (7) 私にはとてもお附合ひは出来ませんと薄志弱行なありさまで人と談じ合ふて仕事をするの教義の講究するのといふ勢のない申さば神經衰弱した人はないで  
せうか

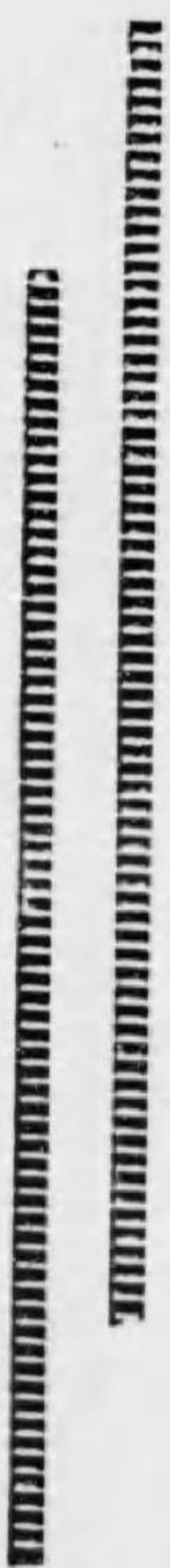
- (8) 昔から段々に厚いおせわになつて引立てもらつた深い恩のある親教會を軽く思ふやうな事はありませんかそれがため御無沙汰ばかりする事がないでせうか
- (9) 教師と信徒とが親しみ會ふのはいゝが通りすこして馴れ合ひになつて物事に際立す威權を失ふて居ないでせうか

(10) あきらめと投遣りと一つに思ふて萬事に冷やかな心はないといへませうか

(11) 養蠶やら麥まきやらといふて農の多忙な時は布敷を休むといふ大間違はありませぬ

(12) あなたの後任が豫定できぬため一代限りといふさむしい心でおいでになりませぬ

初春早々延喜でもないとの御小言もありませうがこの事は篤と御思案を願つて見たいと思ひます下手な鐵砲ごうせ外れ玉もありませう當つた人は充分手當としてくゞさいそして早く恢復して喜ばして下さい



### 年のはじめに

くりかへす曆も新らしく大正の御代も九年を重ねて壽ぐ春は廻り來りぬ津々浦々さては深山のはてまでも日の丸の御旗たて連ねて大君を千代萬代と祝ひ奉り榮ゆる御代を喜ばぬものとはあらじかし

世をわづらはして屍の山さては血の池をや造りけむ海のあなたの戦も治まりて春はいよいよのどけかりける

鶯の谷の戸出れば梅の初花匂ひ高く春の風いたれば櫻の花美はし堀切に菖蒲をとへば早や大川の花火束の間もなくもみじの便りゆきの庭かくして一年をゆめにくりかやしていにしへを偲ぶさまこそおかしくも又おろかなりけり

解放とやらん改造とやらん去年よりの問題こそ今年にわたりて時ならぬ花をや咲せぬらん

ことに勞資といへる解決こそはこよなく難きことにありけり  
高きものはいよ／＼高く低きものは日を重ねて低し花の宴に盃ながす古事はい  
はずもがな酒池肉林にすさびて調ふるものはその價ひの高きをいとはすことさら  
にそれをほこり顔なる片腹いたきことにぞありける  
されどその影にこそたえ／＼の煙りにあすの糧に苦しみ吹く風に夜を寒むおはれ  
なる兄弟のあるこそ忘るべからざることなりけり  
高きものは低き人を知らず低きものはその高きものをうらみて世はいすかのほし  
とや成らむか恐れても恐ろし  
春はめでたしと祝ひていたづらに屠蘇のよひに身を忘るゝ時ならじ  
わがみおやは『きりかへ』といひ『たてかへ』といひくさ／＼に教へ給ひしこと  
の節々の今まのあたりすきみれば尊とさもひとしほ畏けれ  
みおやのみ弟子とあらん人々のことしこそはその力のあらん限りをその働きの盡

きる極みを捧げて道の爲め世の爲めこそいたすべきにあらずや  
われらは心のひもを締め正して誠の糧を貯へ足に鐵鞋をしめてみちのり千里萬里  
など物の數かはと進むべきその旅程のはじめに登る時にぞありけり  
うれしき年は來にけりつとむべき時は來にけり道のつはものいさを立べきたの  
しき折を興へ給へりいざ立むいざ行む其勇ましき戦の場に



# 桃の唇

小簾垂るゝ夏の日永をかこちけり物憂げなるよ風鈴の音

水殿におとせし姿今いづこ浦なつかしき花の影かな

香ぐはしき羅綾の衣も夢なれや床に親む此の身悲しも

柳浪や花袋のふみにかへて見し病床日記さみしかりけり

金燭の光まばゆき花むしろ唱ひし節の戀し其夜を

氷かく音かなしくも響く哉涙なそひぞ夜は静なり

氷囊や絶えぬ重みのその紐に蠅のいくつかとまりけるかな

くれないの色こき桃の唇におもゆを泣いて吸ひにけるかな

食せといふ薬もあきぬ人のする話もあきぬひとりねむかも



### 不自由の身で

(一)

利根の流れにほご近い教會それは振はないものであるが不具者によつて命脈がつかれてゐる

不具者といふのは盲である

明治三十三年まだ御本部ではどんな者も御別席をくださる頃に五席まで運んで以來十四五年間ごうも後の四席を運ぶことが出来ない

その前に手や足の不自由の人や聾や盲の人は御別席がかなわなくなつて本人の失望といふたら言語につくせない

いろ／＼の人を以て特別に扱つてもらひたいの話もあつたが何時も成立たなかつた

或時にさる教會で又その話が出てごうであらう是非にとの迫つた申出である  
一應御伺ひした上でとそれから御本部の先生へ御伺の手紙を上げるとすぐ御返事がきたそれには成つても成らないでもおじばへ運んでどうぞの一心がなければならん大丈夫運んでもらへると案心してくるやうでは熱心とはいへぬ何れになるか受合はぬが眞實定めて参拜するがよい  
ごもつともな御手紙であるなさけ深い思召であつた

(二)

おちもなく本人に傳へると本人は見えぬ目から涙をながして至らぬ私一人のこと  
でそれまで皆様方へ御苦勞をそなへて恐れ入りました

實は最初御信心いたしますときに先生方からお前の目は手術してあちらこちら切つてあるからそれを神様に願ふて見えるやうとは願はれない  
せめて現世では不自由をしつくりしても生れかはり理はけつこうをいたゞく心でや



れと申渡され成程それにちがはぬと存じましてこんな不自由な身で他人様はあれこれと仰せられますが私は笑はれてもそしられても耳にいれず今日までひとすじにやり通してまゐりました

そのお蔭でこんど授訓まで願へるのはこんなうれしいことはありませんと厚く感謝していた

(三)

それから数日すぎ東詰所から朝々手を引かれて別席所へと行く人があつた何でもどうしても長い道中を一心で運んだ効で特別の御扱をうけたのであつたいそ／＼として故國に歸つたその人はどれほど勇んだであらう人数の少ないその教會はともすると盲の人が一人の時もある  
さすがは馴れたもので手さぐりで御神前のそふじ御神饌の上げおろしから出入する人のとりもちとりなしを目明もはじるほどである

親教會の月次祭には紋服袴で手をひかれて禮拜に出るそれはそれは感心なものである

若しも佐原の渡しを渡つて横利根にかゝつたら盲の人の居る教會はと訪へばとんぼとる小供も舟こぐ少女もすぐあすこですと指さして教へてくれるであらう  
幸多かれその盲の人よ

ぼうぜんさゆくもかへるもならぬ時こゝが辛抱こゝろ定める

○ 雨は降らおまいりはない用はないお米もないが小遣ひもない

### 鉛刀一振

△何やつても同じであらふが私が力を注いでいる修徳會も第一から第四まであつて第三は殆んど人まかせ勝ちで申譯けがない第四は會社が職工の改定中一二の二ヶ月は休止三月から復活するであらう

△詮する處問題は第一の千代田と第二の美谷本にある

△先づ千代田に就ては日下三十回以上を繼續しているが廿回から廿五六回位までは實際參集もなく雨降などは十四五人位で實際こつちも泣きたかつた

△けれど辛抱はこゝだと力味かへつて突進をつゞけた今日どうやら初め程の聴衆を得ることができたのは眞に嬉しく感じる

△それから主催側に立つ人の不參これが會の爲に大なる關係があるから今後はどう差繰つても必ず出席して親切な取扱を參聽者に與へてやつてもらひたい

△場所も千代田支教會を限られて在つたのを日本橋新大坂町の辰巳富澤町の中村此の兩氏の宅を借用して順廻りに開會したそれは附近の新らしい聴者を得る爲と店員の全部に行渡らせる爲でどちらも好成績である

△こんな順序でゆくと第一も次第に目的を達することができると一層骨の折れるのは第二の美谷本である

△二味砲兵大佐が好意で毎回應援して得意の雄辯を振られたが近頃は或る會社に關係して多忙の爲缺席しられるので會では大に困つてゐる

△一體川口町は兎角あきやすい處で佛教も基督教も相當の努力で教線擴大とやる集るものが少ないけれど休止はせぬ

△それから儒教的の會合もある狭い川口町で種々なものがあつて詰りはどれも集まらぬ勝になつてゐるは嘆かましい

△それでも第二修徳會は茲に十回を重ねて參聽の種別がだんだんよく成つてゆく

のは注意すべきである初は職工などであつたがその組頭のやうな人が少しづつ加はつて来る

△併し漸く人数の少なくなりゆく當今の形勢はしばらく辛抱しなければならぬやがて廿回以上繼續してゆくと又以前以上の參聽者を得るは千代田に考へても難くない

△社会的にしかも小さな事業であるが淵に落ちる人を止め迷へるものを醒して神明の偉大なる恩徳を感せしめたいと私は月々その會の來るを樂んでゐる

△今の人やまたこれからの人も同じであらふが少し困難な事に出合ふと私には出來ませんと平氣で引下がるそれが薄志弱行で恥辱といふことを知らぬ

△長袖者流の育ちで心に苦勞が通つてないからである

△眞に出來ぬものなら引下がるはよかろうけれど意苦地なしの爲の引下りはちと見苦るしい

△意の弱いのが布教者にとつて第一の毒であらうしかもその毒を愛しているにがくしい人の多いのにも驚くの外はない

△落合直文先生の遺著日本大辭典に先生を解してすべて技藝にたけたる人である

△徳も技藝も職務もなしでの先生は空漠な冷やかな尊號である

△一體先生の尊號が濫用しられ過ぎるほんとの先生に對して所有權侵害だ持上げ過ぎる仲間もちとたしなんだらよからう

△外に儲けて内に年貢を納めている人内に温かき家庭あつて外に苦しむ人世は状々である

△所謂先生で槌で庭掃く待遇を受けて仕合な人も一度家庭の人となると妻君難や子供難で泣かされる者もある虎につばさのない類か

△舊い天理教から新しい天理教に移る時代を興へられた神意畏しとも畏こい形の大きいものが量の重いものになる自然の進境である

△女學校も新らしく成つて若い法學士が腕一杯の仕事や教授もやがては大學部となる時もある

△學問でゆくのが外から内へ教義で直覺するのが内から外へといふものもある眞一筋が本教の生命でその眞の人をつくる上に於て缺くる處がなくばい

△例の活動も二月は品川邊を興行して附近の教會を無暗に頼み廻はつて看客の多きを計つている苦々しいことじやないか

△本部では元より沼交渉であるけれど物が物だけに誤解され易いから困る

△御教祖の一代はまだ刊行されないから唯傳へられたことを聞いている處であるこれを活動に現はすのは根のない花と同じだ活動そのものは時代の必要は認められるのが筋の立たぬものや事實の誤まつた處やらを左も本筋らしくやる處に不都合があると看客の一人は理屈ばつてゐた

### 朝鮮宗教談

朝鮮總督府の渡邊彰君六月十六日の薄暮突然大教會の玄關に現れて先づ名刺を通せられた

久し振りで粗酒といふと酒は止めた見るも嫌ひだとは眉つばものと疑つたが大病にかゝつて醫師の勸告で止めてからこの通り肉もついて精神も爽快になつたこのことである

成程五十七歳の老翁とはどう見てもみられぬ七八つはたしかに若かるふ酒呑は酒をやめて健康を増すが呑まないものは何をやめて丈夫になると主客呵々大笑談は

まづ朝鮮の耶蘇教に始まるあの騒動に英佛派のものは參與せんが米派の牧師などがやつたので其系統は全滅のやうなものである天道教と侍天教は同じ教義で二派

を爲しているが侍天の方が慎重で天道が騒いだのであるその事實は目下草案が出

來ている酒の代りに錢が残るから自費出版をやつてゐる何れ近くそれを上梓して進呈しやう

なにをいふても天理と金光だ神理教などやつてゐるがとて成功の見込がない天理も教線が擴まつたが問題はこれからである

宗教宣傳の上には尠からぬ便宜は與へてゐるので相當な處は府の方から勸めて教會を置かしてゐる併し内部が能く整ふて居らぬと認可せぬことになつてゐる管理

所の澤田君はなかく能く仕事をやるよ上田君は温厚な君子でその下に澤田君があつてまことに都合がいゝ

管理者が變つたやうだが府の認可を得たかしらん先年本願寺で獨斷で替へたから却下した例もある事情に通じてゐるから多分認可をうけてのことであらふと思ふ

今度は三週間の請暇で親の廿七回忌と若松へ行きたかつたが日が足らるので東京でやつた

もふ十七日だけで十八日は出發歸任しなければならぬ

川村辨左衛門は惜しいことをしたが外に親交の人では皆丈夫で居られるが逢つたら宜しく申してくれ東京では家内の實家(高田馬場)に逗留してゐる

いつまで語つてもつきぬもうお暇と車で歸られたのが午後七時半であつた



### 銀丁子の花さく窓より

○  
ある慈善のため演説があつた満場の聴衆は少し斗りの銅貨を握つて寄附しやうと定めていたその演説がだんくゝ進んでこいつは銅貨じやすまされないと音のせぬやうに銀貨とにぎりかへた演壇では益熱烈に博愛主義や恤むべきその人等のとを説いて涙である

聴者も熱してきた金貨とにぎりかへたのが無意識であつた  
 廣い會堂に響き渡る莊重な聲は益々満堂の人を感動させた  
 そして其人々の歸りには懷中は一文なしになるまで寄附した  
 互ひに語りようて喜ばしさうに家路についたとのことである

○

長演説の爲に白髪になつた人もある其隣家に死人が生じたとの一大事もある下手の長談議は人命に關すともいふのか

○  
額にしわがよつた人や眼光がにぶくなつた人や茫然としている人や欠伸やだらしない口元や肩の不平均の人やそんなものが見えた時はもふ中止を希望している表示である

○  
此頃ある場所で講演をやつた參聽は信徒未信徒が各半ばしている前に進んでいるのが信徒で一念傾聽しているに引替へて後ろの方では私語や喫煙やが平氣で行はれている

私はさう思ふたこちらに力のぬけている處があるそこから喫煙や私語も生むのじやあの人等の行爲は私の力の具體化だと氣付いて冷汗三斗

○ 前講に注意することは最も必要である同じ意味を繰替すのは罪がないとして見方によると反対と迄でなくとも行違つたことでもいふともう其會の信用を失ふの討論會じやあるまいし勝手な熱を吹かれては聴衆の迷惑どれほどであるふ注意すべきは前講である

○ ある聴衆全體を相手とせず或る一人に向つて極力するそれが共通である處が多い爲に反つて成功することがあると聽してくれたそれも一説である



### あたゝかき家庭

○ ふたりの心をおさめいよ何かのことも現はれるといふお歌はみおや様のおよみくだされたのであります

○ 親も子も親しみかはし家の内にぎはへるこそ世はたのしけれとは明治天皇陛下の御製であります

○ 御一同には此二つのお歌についてどうゆう感じがおこりますか私はこれから御話をさしてもらいますから御清聴を希望いたします

空飛ぶ鳥も巢をもつております若し人にして親しみ深い家庭のない時はどうゆう冷たい心持ちがいたしますか

○ 家庭とはたのしみの源でありまして百の苦も千の患みも一度家庭の人となると俄に氷つめた世界から花さく春に移つたやうでみなそのなやみを忘れてしまうのであります

○ 實に家庭は神様の與へられた真誠の集りであります喜びの團體でありますここにこした人の集り合ひであつて廣い世界萬の快樂に超絶した神聖の快樂場であらねばなりません

○ 私はそれほど家庭を尊重しますそして無上の天の賜ものと喜びます御一同の心も

私と差別はあるまいと存じます

○ その神聖な場所に悲哀な雨や不和の風が吹廻して涙に袖の干る間がないのはなに故であるのですか

○ 金殿玉樓の奥にも尙かなしみを絶ちません綾錦に包まれた嘆きは日に増して來るではありませんか

○ 私は之れを家の病と申します若し身上障りといふ時は醫師を煩らはし禁厭を行ひ心を洗ひて回復の刻一刻も早からんことを祈りますのは萬人一致であつて至當のことであります



人の身の病はそれほど早く全癒を希ふ人等が家の病則ち不和病を恰かも對岸の火災視してゐる状態はどうしたものでせう

○ 營々と金儲けに世話しく働らくものが其利益をこの冷たい家庭に積んでどれほどの楽しみがありますか

○ 今日一日はせめて内々の圓くなるやうと省みる人がなくてそれからそれへと枝葉の仕事にうつつゝになつて少しも考へないのは甚だしい心得ちがいじやありますまいか

○ 家の治まらない結果はどうなりますか憐れなる不良少年もその家が生むでありませう離縁も産物の一つでせうあらゆる罪は皆その家の子となつて世に現れてゆく



ノ  
ニ  
サ  
シ  
ス  
セ  
ソ  
タ  
チ

このころ

人の身の病はそれほど早く全癒を希ふ人等が家の病則ち不和病を恰かも對岸の火災視してゐる状態はどうしたものでせう

營々と金儲けに世話しく働らくものが其利益をこの冷たい家庭に積んでどれほどの楽しみがありますか

今日一日はせめて内々の圓くなるやうと省みる人がなくてそれからそれへと枝葉の仕事にうつゝになつて少しも考へないのは甚だしい心得ちがいじやありませんまいか

家の治まらない結果はどうなりますか憐れなる不良少年もその家が生むでありませう離縁も産物の一つでせうあらゆる罪は皆その家の子となつて世に現れてゆく



♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

事を思ふと實際平氣で一日も打置くことがならぬのです

○  
私は不和のよつて起るもどを考へてみましたそれは世の中の人を知っている特に記すほどの事では在りませんが二三をならべてみることにしませう

○  
たね違ひはら違ひの此二つはよく世の中にありまして所謂まゝ子根性の生じる處であります妻が先妻の子をいじめ無慈悲を夫は知つて居ても強く押へる事もならず若し強く出ると近處さわがせでとひかへて居る處から家の中がだんく亂れてゆくのであります

○  
夫が若すぎたり妻が若すぎたりする處から趣味の違ひでどうも和合しない事もありませう

○ ちいさんが死に金老母さんが臍くり主人が内證金女房が心掛けの金と一軒の家に財布が四つできると利益の衝突を見ることになります親子夫婦の中で貸した借りた甚だしいのは利息のとりやりとまるでつめたい他人行儀なものがありません。そしていつも金のことで苦情が絶えない家もあるやうに思ひます。

○ 権力の維持とでも申しませうか自分の身内のものを家に入れて權勢を強める甲もやる乙もやる家の中は強いもの勝ちの結果を生じて理屈で一日を暮らすのでせう。お上の目をかすめて賭博をやる妻は止める夫は甚だくしなる朝から夕までの争ひに近處も恐れ入つてゐるでせう。

○ 飲酒の害は尊とい人も安く見られ約束を違ひ短慮の心となり思はぬ間違を生じて醒めての後悔などはちつとも効を奏しません随つて夫婦の情も薄く内を外に飲み廻り堅い儀式も酒でこわして失敗の數々は世の中をよく知る處であります。

○ 山から薪炭を負ふて町に下つて賣上げての歸り道水一杯にのどをうるをはした人もラムネを呑む今日總ての驕奢は都鄙至る處に充ちております。

○ 押へられて不自由な生活から俄に米や糸やと賣るものに羽がはえての高値にこんな時こそと身分不相應な風俗に人目を驚かして得意然たるは滑稽が通り越して寧ろなみだの人です。

○ それでもおかしいのは松坂屋あたりで特價提供となると二階三階は客足は稀れで

四階は人でうづめられたほどの大繁昌で氣のよわいものに手が出せないまでの有様は驕る中からもやつぱり安くてよいものをといふ本能が現れて自笑を禁じませ

ん  
○  
放蕩といふ罪はもう並べますまいあまりにいやらしくなりますから

○  
上品な家庭が日に少くなつて心で楽しむといふ人が追々なくなつて下品な家庭が増してゆきまた物質によつて快をとるものが多くなつてまわります

○  
日本人は國民として強いのである統一した仕事は世界無比であるにもかゝわらず一度家庭の人となるとまるで變つてしまうのは何故であるか大いに考へなければならぬ

○  
一等國や五大強國やといふその虚名にあこがるゝものゝ深くその家庭なるものを認めたら額に汗せぬ人は幾人あらうか

○  
高位高官はいふまでもなく茅屋に住む人までこの温かい樂しみな家庭をもつ人はどれほどあらうか

○  
救ふすべがないのか救はうとしないのか私は世の人の心の奥が計られないのを驚いてゐる

○  
いでや私は家の治りに就いてこれからお話ししてもらおう

眞實は人に相談して出来るものやないの御言葉を先づよむ人の記憶の第一においてもらいたい

○ 物の始まりは一名一人の理であるからまづ一人の心を定めることが肝要であるその定めるといふのは前世いんねんの理とそれから悟つた犠牲のせいしんである

○ つらく御教祖の歩み給ふた道を伺ふにむづかしい處から「始めた」の御言葉につきてある

○ なにひとつとして容易になる事はない開けない道を初められてから五十年は皆このむづかしい事ばかりでとうられる

念入りの彫刻は尊といと同じでむづかしい處から始めた事はきつと立派な結果が得られる

○ 一軒の中で一名がこれだけの約束ごと前世の理であると思案してその行爲が共にひのきしんとなつて毎度申すひくい心やさしい心をして人一倍の働きして効は人にゆづり責は自分で受けて日夜怠ることない人が一人家の中にできたならそれが元となつてどんな家庭も治まらねばならん眞實は我一人で爲すべきもので人と相談して爲すことでない

○ ことに助け場所のとりはらい差止めといふ日がきても助けたい心になつとも變りはないでとの高い御慈悲の御心はうつして萬人の心としなければならぬ

どう苦しんでもどう惱ましい事があつても此の家の中を治めさしてもらいたいの  
一念はその難儀が加はるほど反對に強くなつてゆかねばならん御教祖のあとを伺  
へば必ず強くなるに相違はない

○  
暗より明るみへ出た心はどれほど爽快であるか亂れたる家が一度調のうて親子夫  
婦兄弟が睦みかはしたらその喜びはどれほどのことであるか

○  
内々すみやかなれば大きい理をわたしたいといふのは一名の心より一軒そろふた  
心を神様がおうけとりくださる心の一つに集まつた處に神の働が倍加するの御言  
葉である

○  
一軒が皆よりあふて助けたい心となりたてあひの行ひとなり共に悲しみ共に悦び

利害を一つにして區々の心がなくなるそれが晴天の心である

○  
それで初て人間の尊とい味がわかる値うちも知れる利に敏く金を集める計りが人  
間の能事じやない

○  
ことしは恐ろしい程問題の多い事には大に注意しなければならぬ私は何をさてお  
いても世の中の總ての人に助け合の心立て合ひの心で充ちた家庭をもつていた  
きたいの一念を年頭深く希望する次第である



# 仕事

ひのもとしよやしきのつとめの場所は世のもとやの御神樂歌はそのさとりようで千種萬態に別れようと思ふ  
 軽くいふと地場屋敷そこでつとめする場所が此世の初であるただけの思案もでき  
 る

わたしは『曲解』といふ人もあろうがその『つとめ』の三字に最もおもきをおいてそのつとめなるものが人間最大の尊といものでこの世が幾千代榮えてゆくもとは『つとめ』それであるとの思案もしたいと考へている『つとめ』は働らきである『苦』などのまじらない純なる働らきである更らに語をかへていへば『生産者』である『使用者』『消費者』でないのである  
 わたしは四十年祭といふ警鐘が響いてからハさな胸に状々な思案しているが之を

取つめていふと消費的教會が無くなつて生産的教會が充ちる事が極端である消費的教會といふのはごんなものをいふのかといふと部屬から取上げ一方でその集つた財……素より多額なものでないが——よしやそれが多額でなくとも所謂食つぶしの方面に充てられて仕事の方に遣はれない集まつただけ食ふでは其教會の存立の意義があやしくなつてくる

一錢二錢は端金ともいへるがそれを集めて壹圓紙幣とし五圓紙幣にまとめ拾圓紙幣とかさをひくとして親教會へ持つて来るまでの勞力と丹誠は並々なものやないそれが『食ふ』一方にもしも充てられるやうでは血の涙が流れる併しそれを運んで来る人は喜納であるから一度自分の手から放れたらもう自分の方の身の祈禱がすんだのであるから可否はいふまい理の上から考へても依然とした『消費者』となるのは立派な心の罪じやあるまいかと思ふ

こんな教會が多くあればある程存立の意義を疑はれる事が多くなつていや濫設や



多すぎるなどの悪評をうけるのである人が此世に生れてくるにも使命があるといふ況んや堂々たる集合體の教會が『消費者』以外に出でられないとするところこそ尊とい神様の御靈を祭つてあることも多くの人の集まりも皆無意義になり了るのである

わたしは四十年祭に際してこんな教會の根底から改造せられて各『仕事』に忠實なものとなつて貰ひたいと切に祈るのである教會の『仕事』は説明する要はあるまいが第一は布教である信徒の結成である  
 廣い世界のなかには私は天理教をやめて黒住になりましたと云ふ人もあらふ信仰は各自由であるといふものゝさうゆふ人は種の蒔きつばなし肥や修理をせぬ處から折角此の大道に入ながら逆行的な行爲をするやうになる一度本教の信者となれば脇目ふる要のないまで導いてやるのが教師の任務であらう  
 部屬教會を堅實に増加する事も殊に上級へ盡すことも部屬を巡教することも又時

期を見て社會的に救濟事業に奉仕することとも皆仕事である  
 別してその教會長自身が年々々々精神的に進んで何事も時代に遅れぬといふ事も最肝要である神様は『たのしい』仕事を與へて世の爲人の爲に働らかしてくださいるのを或る怠慢病にかゝりて空しく消費者の旗頭となり雑兵となつて何等貢獻のあとのないのは實際残念じやあるまいかわたくしはかう考へて日頃取扱はしてもらつてゐる部屬各教會を仕事するものとみな改造してほしい是非お手傳してさう成つてもらいたいと切望してやまない

みどりなす島からしまと進むなる相生丸の白き妻は

はしみこぐ島のおのこの頼もしき千尋の海もおそれざりけり

### 呈今上支教會長

あれは明治三十八年の頃でした大澤支教會であなたの説教を初めて拜聴しました  
 時に何といふ上手な人であらうと私はつくづく敬服しました會長の高野さんに物  
 語りますと志木の大澤氏もなか／＼うまくやりますよと稍々得意らしかつた  
 あなたは會長の確に秘藏の子であつたのだ餘程愛せられたのだ  
 星霜茲に十數年古利根の流に春は桃の花影落してさびれた大澤町は依然として發  
 展しようともしない中にあなたが親と頼んだ高野氏は昇天して十年祭を今年の四  
 月に行はれる  
 あなたの感想はどうであるか切に私がかきかしてもらひたいと思ふのである  
 あなたは始終小膽者らしく見受けられてゐる事實正直な人だそれだけ大局に注視  
 しないで片隅の仕事に力をそゝがるゝ事はちと考へものと信じる

既に部屬教會が數箇所もある今上支教會でありながら割合に勢力が伴はない  
 此頃は段々勢力が増して來たと聞くが事實であることを信じたい  
 先頃はいゝお嫁を息子にもらわれて内々も順潮そして息子は別科へも近くゆかれ  
 るとあれば益々仕合せのことである  
 榊田さん——實に今があなたの一轉せらるゝ好時機であると思ふそれは心のもち  
 かへを云ふので此際おれは親教會の會長で重責のある身だこれを深く心の底に  
 修めての行動である  
 さう云ふと今迄無責任の道程を通られたようであるがさうでない唯々片隅主義か  
 ら大局主義に轉せられたいと云ふのである

.....  
 私は最好伴侶とせらるゝ御話をいたしせう  
 或時或書を携へて某畫家先生に見ていただいたそれは或學生の習作である

すると先生は先づ頭部を見てこれはよく出来た此線もいゝあの色もいゝと賞めておいてさて此の耳と咽喉の線が非常に硬いこれは光線の強かつた爲に特に心をそこへとられて筆遣がそこに改まつたので結局大局なるものを忘れての描寫であるから缺點が生じたのだ局部がいくらよくとも大體がまとまつていなければその書に價値がない

話と云ふのはかうである

なんと榊田さんいゝ話じやありませんか私は再讀せられむことを希望してやまな

生前榊田が——榊田がと——愛していられた大澤の會長の十年靈祭のその前に現今の今上の状態を何と物語らるゝつもりですか  
十年過ぎて今上部屬が何ヶ所増加しましたか信徒がどれだけ充實しましたかこれ

らを考へられてあなたは靈前に何と告げられませうか  
年頃からいふても人格からいふても精神からいふてもお道の上に最も得がたき榊田さん——あなたはこゝで一肌ぬいでお働らきくださいませんか私はそうありたいと苦言を述べました

大澤の事は別に言ふ日もありますが衰退のどんぞこより稍々曙光をみとめらるゝ今日あなたの一舉一動は實に大切な事でありませう

江戸川の高いく堤防はあなたの教會を低くく感させます身を切るような寒風に急流を棹して三里の大澤へ殆んど日毎のように通はるゝのはなみたいていであるまい

けれどそれは自ら天の與へはありませうあなたが助かる種まきでせう  
過ぐる年の或る朝突然御訪問しましてこんな淋しい處で私はつくづく長太息しましたけれどあなたは住めば都ですと古い言葉で應答なされたことがあります

その都のあなたの家の内部は實によくとのふた今日あなたの思ひ切つた奮闘は易々たるものです  
 筑波の山は確固不拔の信念をあなたに勧めております江戸川の流れば進みゆくあなたにはなむけの音楽を奏しています  
 春は花さくあなたの胸にも爛熳たる美しい花を祈つてやみませぬ



### 秋元先生

松本先生を失ふて墓標の墨いまだ干かぬ百日目に又も秋元先生の昇天せられたのは言ふすべを知らない  
 先生は大正十年六月頃から兎角勝れられなかつたがそれでも十月の御本部大祭には参拜して別段の異状も見えなかつた  
 十一月の月末からかりそめの床に就かれたとのみ思ふていたのが終に再びその雄姿を見ることのでけなくなつた初めであつて三月二十一日は先生最後の日であつた神明のおはからひとは一同は悟つてもいるものゝ今世の別れ泣かぬものはなかつた

一週間ほど前に後事を長男實氏に告げて間もなく人事不省のやうで水だけは飲まれたが穀物は少しも食べられず唯すやすやとして終に廿一日午後一時そのまゝ

呼吸は絶えた實にらく／＼とした御昇天であつたのである  
長男 實次男 鎌吉 三男 信平の三氏は各一家を成して秋元家の後事は何等憂ふるに  
足らぬ

殊に豊多摩支教會はさすが先生の命をうちこんでの聖業であるだけに基礎固く今  
後も一層發展するのみであらう

かく思ひ奉ると先生の昇天は所謂天壽であつたのであらふ

先生性質雄々しいだけに兎角一直線に進みかちの處から追従しきれぬ人には蔭口

くらしいは言ふやうにも聞いたがそれは畢竟世迷ひ言にすぎぬので先生の徳をきづ

つける事はできぬ

豊多摩出張所と云ふ時代には關と云ふ方が所長拜命して居られました逝去せら

れた後ち先生其任務に當り四十一年支教會と改稱し教運益々隆盛であつた

雄々しい中にも慈悲深く人の世話は随分なされたと云ふ事であるから人知れぬ悲

しみに打たれたものも多からう

追ては分教會に改稱したしとの考へも以て居られたが其時を得ず墓標にも銘旗に

も支教會長の名は遺憾なりと嘆くものも多かつた寶仙寺内に末世迄でも鎮ま

ります先生の参拜者の標とした檜の五寸角は時來りて石碑に改められるは遠き

事ではあるまい其時は必ず或る一字が改修せらるゝ事を信じて居る

古田大人へ

衣ぬふはりまの國にたゞ一人  
この人ありて國は尊さし

### 寸間講話

一寸てみじかに一席のおはなしをと思ふがつい長くなつてといふお方へほんの御参考までにと書いてみる

#### 〇ひとつころ

ころそろへて一家の者が日々を通らしていたゞくのは千萬のたからよりもつとゞ結構なことでございます

いんねんよせてとおうせられました親となり子となり夫となり妻となるのも皆々神様のおはからいでありまして私事に勝手になつたと思ふては間違ふておりますどんな人も前世いんねんは知りませんが此世に於て日々通らしていたゞく上からおちついてさとりしてもらふと「いんねん」といふ事が心のうちにわからしてもらふことができずそのいんねんを一人でさどつても家内中のものがその心でない

と折角あれこれとたんのふ一天張の道を通つてゐる人もどうかすると倒されて元のはこりの心にかへることがございます何事も「しゆん」「こくげん」がありますから先生方からおさとしを伺ふときもせひ家内中集めてきかしてもらわないとどうも内々の心がそろいません今にわかると思ふのは油断は大敵で同じ旅をする人も足の早いおそいに依て一日の内に三里も五里も先の驛にゆく人とおくれて宿をとる人もありますのと同じことで道のさとりもだんだん深くなつてくるによつてよろづはこびの道もとゞのうて参りますのであります

どうでも自分だけといふのはわかれわかれの道のあるのでありますから心のそろふた一日を生涯みせていただくことはできません

先刻ももふす通り何でも家内中そろふておはなしを熱心にきいてくださいます「よろき」のころ「いさんだ」心で神恩教恩を此上共充分にきいていたゞくようおすすめをいたします

### 當世誰が身の上

御喜びください手前の悴も此頃田舎へ行つて講演いたしまたそして評判も大きに善くて満足いたしております

或る親は私にかう云ふておいて豊年に逢つた百姓のそれの如く満面喜びに充されていた

嬉しかろうよ悴が賞められて怒る親はない

教理のよく修まつている信徒の集りへ行つて講演したのがどれほどの事と思ふて

由來信徒は聴かぬ内から喜びをもつて集つてゐる演者の甲乙や講演の善惡をいふやうな批評的態度をもつてゐるものは無い筈じや

その中に飛び込んで感謝の深い念を捧げている神様の御徳やら又それを根底とし

た時代順應のことやらを話されたらそれこそ感極つて泣くであらう

何のことはない酒呑みの集りへ酒をもつていつてやるやうなものである

そんな事で内々もふごこへ出てるといふ小才子になつてはそれこそ大變な代物になる

私は公開……信徒未信徒集合……のことはいふまいそれよりも今一層適切なこと

がある  
私は若い人未來ある人にもつとお助一條に心を砕けといふことを切望する

病める人の短かい冬の日を煩悶と苦痛の爲に暮し兼ねたり明け易い夏の短夜を堪えがたいのであかしかねたりするその人の枕頭に靜に神の御名をとなへておさとしをさしてもらふことの如何に神々しく人助けといふはこれより他にないといふ念が涌くうれし

遠い道を漸く尋ねあてゝさて患者に神の御教をと思へば無情にも聴きたがらぬや

うな日もあらう

五度十度運んでも聞分けのつかぬ人や本人だけは信仰心があつて他の人はうるさがる家や種々の實状は自ら心の學問となつて世態人情の妙諦に觸れ 益濟世救人の急務を感じるのである

私は講演を排せぬけれど此個人布教から研上げなければ眞の信仰に達することの遅いことはいふまでもない

講演は講演だ助け一條の個人布教を先にすることだ



### 趣味旅行 (上)

急行に乗らぬと貧乏臭いとは誰れが云ひ出したか猫も杓子も急ぐも急がぬもやれ特急だ三急だとそれが爲にいつも満員づくめで通路に横臥は珍らしくない

おまけに安くもない急行券を買せられ狭い思ひして不愉快な旅行世の中にこれはほど馬鹿な話はあるまい

尤も新式の車が出来ると省の方でも急行に一番先に使用する傾きがあるから氣心のよいこともないでもないが毎日毎月新式の車が出来るわけでなしさう珍らしいが

勿論急行は短區間の乗客がない爲に出入はうるさくないが満員ときたら國府津や静岡で降車する人はなくて大概名古屋以西でこちらは名古屋で乗替するからつまり座席が少し豊かになりさうになつて車を捨てる勘定となるのである



直行には食堂がないが急行には食堂があつていふ者もある併し其食堂たるや仕入た計りの温かい飯は暫時でもふあとは冷えたのや残飯然としたこぎたない櫃に入れて粗畧な膳部勿論五十銭では無理もないがその不自由たらしい食堂へゆくにも例の狭溢な通路をあへぎく通り越して行くので興も味もなくなつてもふ譯である

序でだからいふが驛賣の辨當も悪くしたものだ差入の飯といふものを食つた事はないが甘銭の辨當と來たら飯計り澤山で副食など沙汰の限りであるせめて香の物の色々を澤山入れてあれば反つてうまかるう

名は上等といふてもそれは甘銭に對する名で上等でもなんでもない道中するものは食ふのが愉快の一つであるものを食はされては閉口だ

それでも沿津静岡に次いで名古屋あたりは先づ下の中の上の部であとは撫で切りの粗畧である驛賣商人も倉も建て財産も殖したかるふがもふ少し細く長くやると

して品物に大勉強してもらいたい腹がすいたらいやおうなしに買ふであるふと思ふのは大違ひでそろ／＼あいそつかして手辨御持參が見える御用心／＼さて話しは本道へ戻つて壽司詰の急行よりは少し趣をかへて他の直行に乗つてみるもよかるふと茲には往路に一泊する豫定で時間表をつくつて見た

午前六時四十五分

東京驛發こいつは朝が早いので不賛成が多かるうが代償としては沿道の風景はほしいまゝだ午後六時〇六分名古屋驛着で格好な宿(いづれ御定宿といふ所謂指定旅館)茶代なしの當世向——をその内に定めたと思ふ——へ飛込んで一浴夕飯の後は市内の散歩である愛知教務支廳を訪ふて現況を聞くもよく愛知分教會に参拜して教運發展の實況を見るも可である若し餘れる時間があつたら本町通りから記念碑の邊夜店をひやかすも一興で大須の観音の雜沓も話しの種であるふ物價の安いのは名古屋の特有である別段これといふて珍らしい品ものもないが物

産もある處である

鯨の城の夢でも見翌朝はちどゆつくりと午前八時四十分名古屋發車とする  
いひ添へるが驛の建物が小さい處へ八方へ行く列車で混雑が一通りでないから切  
符の買入なども豫定の時刻より十分や廿分早くゆくことが安全である  
その列車は港町直通であるから龜山乗替もなく一時十四分奈良着一時二十八  
分奈良發一時五十分丹波市着とかうなるわけである

午前八時四十五分

東京驛發これは時間もいゝが午後六時〇九分に豊橋着まづそこ泊りとする旅館は  
壺屋がよかろう

豊橋は市となつて異常の發達した旅團もある昔は今橋といひ中頃吉田と稱へ明治  
になつて今の名の豊橋となつたと或るものに書いてある人口約六萬これにも教會  
もあろふが一寸知らない

翌朝六時二十三分發車して八時十九分名古屋着でそのあとは前掲と同じ時間にな  
る

午前十時十五分

東京驛發後六時五十分濱松着である茶や樂器や遠州編で名高い處である人口約五  
萬東に天龍川西に濱名湖があつて商業地としては豊橋に勝さつてゐる  
國學の泰斗加茂真淵先生は近い岡部といふ處の人で江戸へ出て苦學を主張して母  
の死目に逢へなかつたそれを悔いて母の墓前で

野邊の露消えせぬ程に訪はざりし

我身の罪ぞ置き所なき

泣くなくも別れし時をわかれにて

別るゝ親の無きぞ悲しき

と嘆いたとの事である

濱松にも教會があるふが今しらべてない翌朝六時四十七分發車して九時四十七分名古屋着十時十三分發車二時四十一分奈良着二時五十分奈良發三時十五分丹波市の人どたれる

午前十一時四十分

東京驛發これは毎度おなじみの汽車で京都廻りすれば翌朝八時丹波市にゆけるがその平凡を破つてこゝには午後六時〇六分静岡泊りとする驛前にはよい宿が澤山ある

静岡分教會に參拜するもよし淺間様を拜するもよし市内には交通としては人力の外に何もない徳川家康の隠居した處で今は人口約七萬東海道屈指の都會である習朝午前六時四十七分發車して十一時〇三分名古屋着十一時十五分名古屋發後一時十五分龜山着(のりかへ)一時廿七分龜山發(急行)急行券はいらぬ三時五十七分奈良着四時五十分奈良發五時廿三分丹波市着

まづこの四列車を選んだのは急行以外の利用である一泊をうるさく思ふ人は別段少し心をおちつけし參拜と電信配達とどちちがへる程あはたゞしくやりたくない人の參考にもと記して見た記者が此稿に萬年筆を走らしていると傍から本部へ參拜するのにそんな泊つたり見物したりして行つては面白くないと云はれたそれも一理これも一理浮世は兎角心次第まづ以て擱筆して次は復路をしらべて見ることにしやう

枯野

吹雪する枯野に立てば御祖神

かく坐せしかさ涙こぼるゝ

### 趣味旅行 (下)

別席授訓の人は直行の往復は定まつてゐるが數度數十度御參拜する人の歸り途や又途中用足をする方々の便宜の爲こゝに數々の歸り方を書いて見たこれは八月號に掲載する目的であるが八月一日から列車運轉時刻の一部を改正するとのことで小異はあらうが大體の變更はあるまいと思ふ豫期より相違が甚だしかつたら又書くことにしやう

#### 伊勢廻り

國民として伊勢の御大廟を拜せぬものはない一度は是非と心掛けるのも至誠のいたす處である先づ丹波市を朝の六時三十分發車して六時五十二分奈良に着すと湊町から鳥羽山田行どかいた札を下げた列車が来るそれが七時二十一分奈良發車である

龜山も乗替なしに直行して便宜上二見浦に下車するがよからう山田に下車する方は山田驛より三丁右側に大和館といふのがあつて信徒の定宿で御直段も頗る格好に出來てゐる

二見浦 (茲にことはつておくが關西邊で二見といつて切符を求めると高野山の入口近い處に「二見」といふ處があつてそれを賣られるとそれこそ大さわぎになる買ふときに伊勢の二見浦と明らかに云はぬと驛員の聞あやまりもあるから注意する事だ) に下車すると五六丁にして海岸の白砂青松いかに清々しい處に來るここに二見館といふのがあつてそこが教會の定宿になつてゐる値段はあんまり安くないが高が一夜の泊りきつい事はない

そこに荷物をおろして單身輕装して驛前の電車停留場から廻遊切符則ち内宮外宮二見歸りのものが割引がしられて徳用である中には内宮まで電車でそれから御幸街道を自働車 (約十分間) で外宮まで飛ばすものもある

内宮は宇治橋手前で電車から下りて橋から一丁で見張所がある尻をさせおつたり  
子供に物を食べさしながら歩いたりすると注意せられる

何事のおはしますかはしらねどもありがたさにぞ涙こぼるゝの西行の歌はその神  
聖なさまを説明してあまりある

歸途は宇治橋から外宮前で下車して参拜すまして二見行に乗ればゆつくりと夕方  
までに済むことになる

安らかな旅の宿りからさめ濱のいさごをふみしめて二見館から三丁男岩女岩の  
双岩が手にとるやうに見える六七八九の四ヶ月はその中間から旭の昇るのを拜す  
ることができる

朝飯後は鳥羽に遊ぶもよからう日和山の眺望は尾三の山は目の下で小舟の帆影も  
すてたものでない

午後三時廿三分(山田なら三時四十分)二見浦發車七時四十七分(龜山のりかへ

なし)名古屋着八時十三分名古屋發翌朝七時東京驛着  
二見浦や山田をもつと早く出發したい人もあらうが名古屋で待ちくたびれるそれ  
よりも此時間を利用するがよい

近江八景

記者はまだ遊覧したことがないから兎も角も大津に下車してから遊覧汽船もある  
石山行電車もあるから便宜まわられるがよい近江八景といふのは支那の西湖八景  
にならつて後世見立てたものといひ傳へられている

丹波市朝六時廿分發六時五十二分奈良着七時五十分奈良發九時三十二分京都着十  
時四十分京都發十一時五十二分大津着

一泊して翌朝五時五十分大津發その日の夜十時三分東京驛へ着するものゆるく  
するが見物を夕方までにすまして夜行に乗るのもよからう夜行は急行のほかはな  
い

大津發後十時(三等急行)

東京着前十時

天智天皇の都をおさだめになつたのが大津でその頃は榮えたものであらふ

さゞ波の志賀の辛崎さきくあれや

大宮人の船まぢかねつ

優美な人が袖を風にまかして波止場に船まぢしてゐるさまが思はれるこれは柿本

人麿のよんだ歌である

後世そのあとをとうた人が

小波や志賀の都はあれにしを

昔ながらの山櫻花

といふのやら又

雪ならばいくたび袖を拂はまし

花の吹雪の志賀の山越

古くから有名な處で現今では滋賀縣廳所在地になつていて人口は約四萬とのことである

岐阜

丹波市は朝の八時十四分奈良着は八時四十二分九時五十七分發車して京都へ十一時十九分着中飯などすまして一時十五分京都發五時廿五分は岐阜着

こゝにはさして是はといふものもないが夏は鮎狩で名高い醍醐の御代から鶺鴒といふて傳はつている

おもしろふてやがて悲しき鶺鴒かな

の句もあるまた

このあたり目にみゆるもの皆涼し

とよんで納涼に適した處である金華山の秀峯のすそを流るゝ長柄川そこまで見え

このころ

る清水で幾十羽の鶺鴒をつかひわける鶺鴒はなれたものである  
いゝ心もちにすすんだあとは旅のかりねも心地よかろう翌朝の九時十三分にのれ  
ばその日の夜の十時三分東京驛へかへる

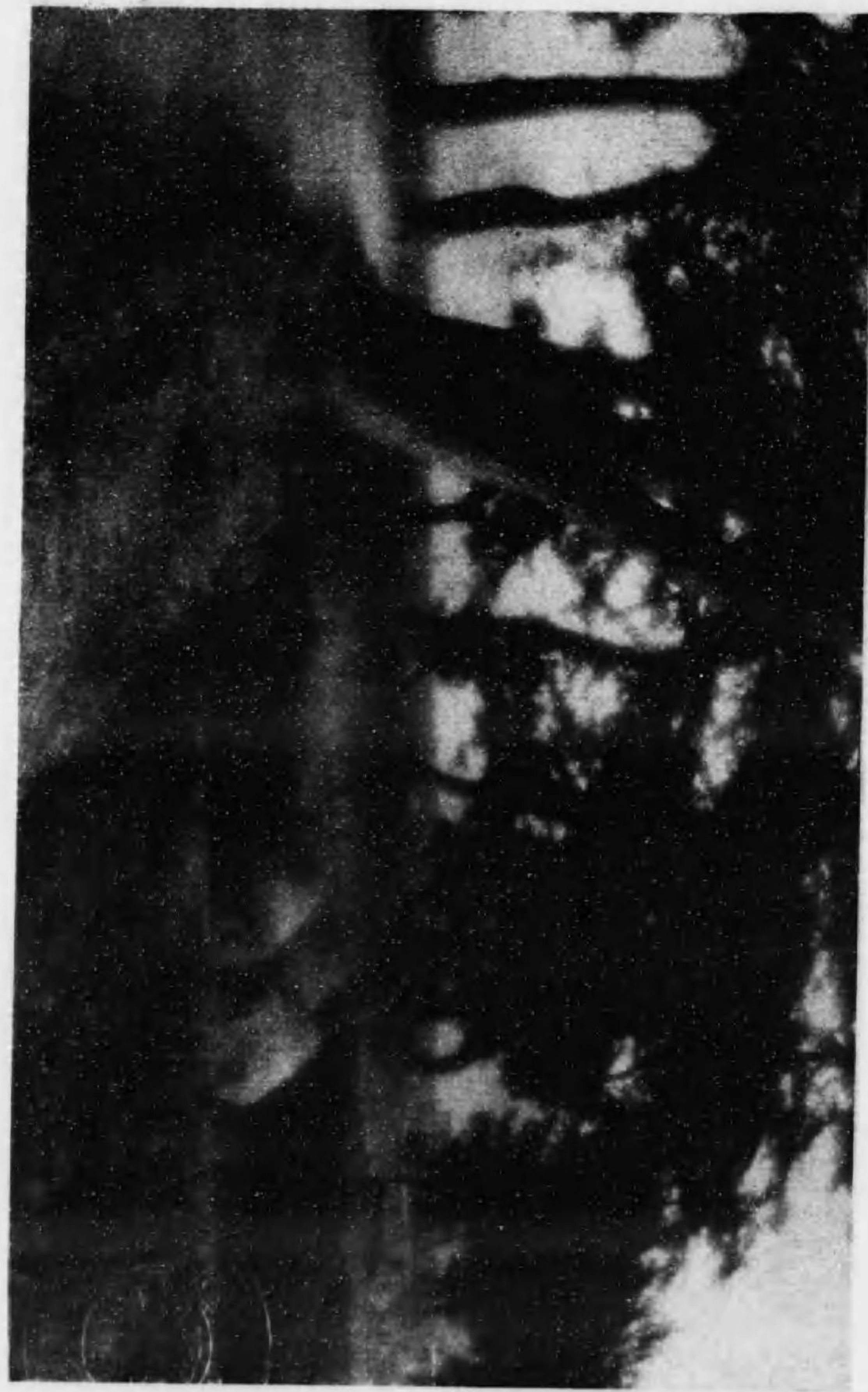
大垣ごま

大垣は戸田氏の舊城下で天主閣は今も聳へている

柿ようかんの名物で名高い處である人口約四萬市中はさして賑かでないが養老の  
瀑がちかい

大垣から養老驛鐵道があつて養老驛から僅かに十丁高さ十丈五尺幅十二尺一直  
線におちている

けれど此時間では瀑見はできない強いて瀧見をするならば一泊の上大垣發七時十  
五分養老着七時五十分見物してから養老發十一時十七分大垣着十一時五十二分  
大垣發四時五十七分東京着朝五時卅分



このころ

る清水で幾十羽の鶴をつかひわける鶴飼はなれたものである  
いゝ心もちにすすんだあとは旅のかりねも心地よかろう翌朝の九時十三分にのれ  
ばその日の夜の十時三分東京驛へかへる

大垣ごまより

大垣は戸田氏の舊城下で天主閣は今も聳へている

柿ようかんの名物で名高い處である人口約四萬市中はさして賑かでないが養老の  
瀑がちかい

大垣から養老驛鐵道があつて養老驛から僅かに十丁高さ十丈五尺幅十二尺一直  
線におちている

けれど此時間では瀑見はできない強いて瀧見をするならば一泊の上大垣發七時十  
五分養老着七時五十分見物してから養老發十一時十七分大垣着十一時五十二分  
大垣發四時五十七分東京着朝五時卅分



この時間の割方はすべてゆる〜といふのが専門で大晦日と火事に追はれるやうなガチャ〜式でないことをことわつておく  
筆の走るまゝに書いたものはその題の趣味もないのは赤面である旅客の心で落付いたさわやかな気分の旅をとわざと急行列車をさけてのやり方まあ實行してみたまへ

京都大阪は浴ねく人の知る處であるからわざと省いた



# 一 針

生活難を訴へる聲は事實となつて來た職にはなれて高い米での生活は容易なこと  
じやない

○ 商人や職人は浮沈はあるから昨日迄の困苦も一度職にありつけばもう大丈夫で  
あるが宗教家の生活難は意外なものだ

○ 私の旅行の途次ある教會では先生が麥飯を上つてござる此の教會では何々と耳に  
するのは常であるがこんどきいたのは實際同情にたえない

○ その先生や家族は米や麥やはとても収入に對しての常食でない授つた額の上か

らはこれが至常だといふて常食して居られるのは外國米一升の中に北海道のさ  
ゝぎ一升（一升廿五六錢）それである

○ さゝぎ計りで米等は見えない位である時分になると參拜者は御馳走しられる

○ 私はそんなものは營養不良になりはせぬかと聞くと先生至極平氣で夕飯後七里位  
の先きで御助けに連ばさしていたゞきます家内や子供も丈夫に御座います

○ 都に住んで米の飯を食ふて怠け半分の我等は赤面する外はなかつた

○ これは方角の違つた方で別段生活難の爲じやないが土地の習慣とでもいふのだら  
う

○  
 或る所長さんが麥飯をたべてゐたすると世話人が潜かに物語つていふにあの所長さんはとても長持はしますまいあの状ではと麥飯に對するそれが批評だ

○  
 勿論其地方では醤油を半樽買つて水を入れて一樽分にして鹽を多量に投入して使用するそつだ

○  
 炭が下つた呉服も安くなつた銘仙も疋で十二圓の投資りが初まつたと新聞は二號や初號で書ちらかすやがて米が安くて食れませんの時代が近づいた眞の生活難はこれから本題に入るのだ

○  
 世の爲人の爲に粗食して崇高な勤め働きそれは至つて尊きことである

○  
 私はどうか心を倒さむ様一層の堅固な信念を樹立せられるやう祈つてゐる

○  
 一般人士の虚榮の夢は醒めて實生活に入るに就いてせいたくに酔ふた身を引き締めるには人知れぬ困難があらう

○  
 私は九州の山奥の教會にこんな食事で信念堅固に世の爲人の爲につくしている人々を紹介して一針を與へておく

柴田大へ

おひの身につもるよはひを忘れつゝ

おゝしくだつる道の眞柱

ありし日をしのびまつりて

まふで来る人の朝に夕べに打つ拍手の音の絶ゆることなく神の宮居の軒高しみのりの深く坐すこそかくあんめりと春は吉野初瀬あたり秋は龍田奈良と浮れゆく旅の人さへ川原城より折れて三島の町のにぎおふさまさては神坐す館を仰ぎてそとろに禮厚く古郷への語り草とあなたを經廻るこそ畏しとや申すべかりけり今こそ石段の數も多く白壁も美しくしかれとありし昔を思へば涙の種ならざるはあらじ

嘉永の六年中山の善兵衛大人は幽冥にと神上り坐せり悲しきが内にも野邊の送りもいとなみ給へり

わが教祖は涙のうちにも神憑の道はひととまともも忘れ給ふことなくふかきなきけの御心は休らうことはあらざりけり

さるにてもお住居の荒れゆきて朽ちにし板戸はすきまの風のいとと寒く細く立つ日ごとの烟りもその状さへ伺がはれて畏しとも畏けれ

神さまは一代はなんぎで通つてくれとおつしやつたで教祖は折々くりかへしてかく教へ給ふ

火の中に身をこがす人もありけり水仕にやつれゆく人もありけりされどわが教祖はあけくれ易く世を渡る御徳を道のためとてかくはほそ道をこそたごらるゝなれ

細かりし烟りは立たずなりぬ家にあるものゝ人のたよりとならん物は皆はごこし給ひて名のみ米櫃には麥のひとつかみだもあらぬまでもおちぶれ給へり

秀司大人は甘菜辛菜などを近きあたりの町へ呼賣し給ふ身をや痛め坐さん聲をやからし給ひつらん鈴のひゞきを先だてゝ驛をいそぐ夕ぐれに生駒の山は陰くらくなぐらにかへる鳥の聲もいと悲しく暮れ果てゝ家路にと歸り坐すことは水かさ

ます布留川の雨の日もいその上の森の風ふきすさぶ日もかはらざりけりことにい  
 たましくもしのびあぐるは小寒様の御身なりける  
 花も盛りと人唱ふ十七のおとしによしあし繁き浪花の津に布教の爲といで立ちま  
 せる神の御名さへ知らであらぬそしりをたつる人の中へかよはき花の身を神の道  
 の爲とてつくしませるこそ眞の心は世に恐るべき仇はなかりけり  
 こころありけに照る月の枯枝をもれては糸とるわざを爲し給へり霜夜をひやく鐘  
 の音も氷りやすらむ親をもとめてさまやう子犬の聲悲しく渡る  
 虎すむあたりの國さては氷の山の漂よう濱邊まで神の御名は照り輝けりされども  
 百年の昔は教祖はいはずもがなその御子たちにもかゝるいばらの道はありてこそ  
 今はかくも普ねかりける

### 反省せよ

○ 肉體の爲に心が動かされて在るまじい行ひをして行止りました時が暗黒界であり  
 ます是非曲直の判断も義理人情もなくなつて深い苦痛の海へ沈んでゆくのであ  
 ります

○ 我々は此肉體の上に種々の快樂を興へられますと共に又甚だしい苦しみをいたし  
 ます人の性は悪なりと断じた説さへありまして或る見方をしますと人は罪惡の結  
 晶であります

○ その罪惡のもたらす苦痛は當然の結果であつて子々孫々に及ぼすべき恐ろしい源

泉であります我々は如何にして脱することができませうか

○ 安愼な安心や雷同的の安心やはとても問題にはなりません語を進めて申しますと人間の理屈では浮べないと申すことであります

○ 何れの宗教でも罪を救ふといふことを説かぬものはない實際罪からはなれて宗教はないとも云へる

○ 罪を軽く扱ふた宗教派は惠念我を信すれば罪は消えて死後は仕合せがあると教へてゐる又理屈詰にしたものもある

○ 我教義によれば罪の原因や作用や結果や祓除やを悉く教へられてゐるから總て

が判明せられる

○ 私は今其原因や作用をにおいて祓除に就て一言さしてもらひたい即ちさんげに關して述べさしてもらはう

○ さんげは舊い汚れた魂が新らしく清められるのである同時にあらゆる埃(教祖は罪を埃と仰せられた)は消えて其人間にかへるのである實に偉大なるものはさんげである

○ 或る事によつて我々は過去の埃を祓ふとして至誠以てさんげするとしたならば過去の非がよく認めらるゝと共に又善行をも認める心があつては眞のさんげと云へぬ

○ 勿論善行を非認せよといふ意味でない眞實さんげして助けて戴きたいと祈念するものがその一念の間に我善行をも認むるやうな餘裕ある精神ではならぬ所謂他念を起さぬやうと云ふのがそれである

○ さんげは勘定じやない報告じやない貸借勘定でもするやうなそんな貧弱な薄い信念でなせ神様の御助けがあらふ

○ 素より善行は神様の御受取りがあると同じやうに埃も又御認めくだされたならばこそ身上とか事情とかでさんげする日を與へられたのである

○ 繰かへす迄もないが善い行をしたことまで浮び出るやうなさんげのしかたでは

確い信念でない

○ それから一度これはと後悔したさんげした事を日を隔て、又くりかへすやうではそれも無効である

○ さんげと共にその以後は教に基いた人の道正しい行を實にしてゆくことが最肝要である

○ 私は思ふ病身の健康になるのも禍を幸とするのも亂れたものが正さるゝも不安に沈んだものが安心立命を與へらるゝも皆さんげの徳である

○ 此雑誌をよむ方は皆御神徳をいただかれた人であるから今私の述べたことは既知

の事實であらふ私は序にこんなものを附け加へておかう

或る本によると信仰の逆行といふものがあつて事實に書くと

俗におもねる

人と争ふ

短氣

貪る

酒をのむ

約束を違ふ

勤めに怠る

私が見えしられているかの感がある

輕薄な談話

人の缺點をさがす

日々を不平

罪を軽く思ふ

名を求む

虚言を屢々する

折角さんげの徳によりて助けられたものが金のある人や勢力のある人にお上手して我身の榮達を謀ろふとしたり無責任な事をいふたり説がちがふといふて争ふたりしてはならぬ

○ ことに我事を捨て、猥りに人のあらをさがして公表したり短氣や殊にけつかうな御守護のある日々を不足不平をいふて恨んだりそれねんだりしてはなるまい

○ 貪ることは大埃である罪を軽く思ふのは信念の薄弱を示したものとあとの三項も一々いふ迄もあるまい

○ よごれた衣の洗濯はやさしいものじやない汚すのは瞬間である汚れた衣それは自分か厭ふまでもなく他人も迷惑である



私は共に反省して更に真面目に歸ることを祈つてやまない



よしあし草

道についたと彼は云ふ  
成程道にはついたので  
三年五年鳴かす飛ばす  
彼はあきたと私語をした  
日に冷かな心と變りゆく  
さみしき原に彼は立つ  
花の香の高い山も  
緑の林のうつくしいのも  
真帆片帆の浮ぶ海も  
彼のゆくてにある

歩むことを知らぬ彼

働らきを厭ふ彼

幸福は来るものと悟るか

自身で取りに行くことを知らぬ

風雨のまゝに朽ちる彼

あはれ歩めあはれ働け

曙光は前途を照らす

高橋大人へ

うつしゑに世のよしあしを寫してぞ

眞の道をたどりゆくかな

### 思ふまゝ

▽おみちに初めての方はいろ／＼おはなしを承はつて今迄は知らぬゆるから勝手の道ばかりこれからは心をあらためますとさんげいされる

▽所が又身上おさわりでもふ今度といふ今度こそは力をいれて申譯をする

▽今更のことではあるがさんげは自分の一生をあかるくうれしく楽しく暮されるやうになる一つのふしであるその節をいつでもあるかのやうに思ふて眞の心の底からの悔いあらためがでけぬ

▽一丈の井戸も尙水がわく十丈の深さも涌くしかも中水と清水との區別のあるは勿論である

▽御教理のきゝはじめに中水同様の浅い心での信仰は心がわりが多いさんげの大切なるは深く掘つて良水を得ると同じやり方でなくてはならぬ

▽身上障りは心に樂を興へ給ふ暗示であるそれを畏みてすつかり前非をあらため將來の極善を行ふ心定してこそ神命に報い奉る故であるふ

▽大正二年六月の調によると罪人の現在が六萬四千九百五十六人でこれに要する六百五十萬圓は一ヶ年の經費で一人約百圓國家に費させるのは恐ろしい事でないか直接國家に貢獻するなしとするも反對に國家に盡させるのは困つた次第である▽これらの人も親が悪行せしめたいと希望したでなく學校は教育したのでない教へられた事は出來ず教へられない事に熱中した結果がこんな人を殖やして行くそして其子となり妻となつて居つた人が悲惨の境遇にあるのは氣の毒千萬ではないか

▽數の初は一である積んで千萬億となるさんげするやりなほしする更にやりなほしする内に終は一ヶ年百圓を國家の負擔を増しゆくなからんやうにしたい▽井戸堀は水の道を考へて堀ると聞く埃多き人は水道の不明なものともいへる井

戸堀たるべき教師は先づ已れ深く御教理を修めて『あいそづかしせず』を銳利なる道具として根底深く堀らなければならぬ『いんねんもんや』わからん人やの水がわき出るとも屈せずたゆまず良水を得ぬ間は道具と手をゆるめてはならぬ▽あの人にはわからんとは能く云ふ詞であるわからん人も必ずわかる人となるものである其道を以てしなければならぬ

罪を初て見た時は二目と見られぬ恐ろしい顔である度々逢ふと段々心易くなる兄弟のやうになるしまひにだいてねるやうになる▽なんとかいふ本で見た或る村の教師が其學校を退いて國に歸るといふので世話になつた人が集つて葡萄酒一樽を餞別にする事にした先づ一つの樽を据えて銘々持より一瓶宛をあけて行くのであるやがて充ちたから蓋をして恭しく呈した教師は大満足で運賃をかけて故郷へ持歸つて居村の人等に御馳走しよふとくちをあけた所水が出て來たこれはおかしいと思ひながら出せどもだせども水ばかりし

まいに空樽になつた驚いたのは村の人等でどうも禮のいひぞん恥をかいたか教  
 師さてこれは何故ぞとだん／＼調べてみると贈りたいといふ人の中に皆が酒をも  
 つてゆく已れだけ水をもつていつても一びん位はわかるまひと不透明な瓶である  
 から水をつめてそしらぬ顔であけておいたその人が一人だけなら格別のこともな  
 かつたであろふがそんな心の人計りなにおれぐらい／＼と皆が水ばかりつめたこ  
 は人情の浮薄を戒めた訓話であるふか一寸うまくうがつてあると思ふ  
 ▽一年中のあつい月堪え難かろうが親様の昔をおもふてうますだらけす爽快な精  
 神で御奔走願たい避暑はせずとも煽風器あらずとも清涼なる風は胸中に充つであ  
 ろふ

### 長命と慾

今日は御多人數よくお集りくだされましたこれからお話をさしてもらひますが篤  
 とおき／＼とりをねがひたい  
 人間で恐らく長命をねがわぬものは一人もないのでありまして時々不慮の死に方  
 する心得違の人あれば別ものであります勿論その當時はさうするより外に道はな  
 いと行詰つてしもうたのでありませうがごんな事も相談や解決の出来ぬものはな  
 いのであつて神様におすがりもうせば必ず助かるものをさりとはあまり短氣すぎ  
 たことゝいわなければならん  
 そこで長命を祈るのは人も我もおなじでありますが果して神様から長命さして  
 ださるだけの道をとうつておる人が幾人あるでせう  
 昔から空鐵砲では鳥さへも死にませぬわれ／＼が『祈る』と云ふ誠意その誠意が

神様に通じるのでありますから誠意のない『祈り』は空鐵砲であります  
そこで今度は誠意と云ふ事について申述べなければならぬ教祖様の色々おきかせ  
くだされたおことばの内に『よく』にきりないどろみづやと仰せられてこれは誠  
意になれない心遣ひでありましてつまり慾のこゝろがあればこそ泥となり濁とな  
つて總ての物を見別開別がでけず盲目同然たるものとなるのである  
そんなら誠意とはどうするのかといふと心澄みきれとかうおしへをいたゞいてい  
る  
心すみきるのはほこりのない助けたい一方の心となるのであつてさうならぬと誠  
意がない  
人間は名譽の慾や物質の慾やあらゆる慾に心をつかはれて所謂慾心の自由になつ  
てそしてそれが功名だとか立派とかの夢をみております  
そんなら今いふたような人が長命したくないかといふと八十も九十も百でもと際

限のない長命を祈つているそれはちやうど後向に神様を祈つているようなもので  
方角違ひの願をしてている  
つまり慾は人間の執着するものであつて一度その道に入ると深入こそすれ省みる  
といふことがなくなるのであります  
そこでどう思案しても慾と長命とは右左にあると闘じなければならぬ二兎を追ふ  
もの一兎を得ずでどちらか其の一つを選ばなければなりません  
慾張つて短命で了ることを満足するならばそれも其人の方針でやるのだから致し  
方がないようなものゝもう一度反省してもらひたい  
山のように積んだ金や見渡せないほどの田地やそれが果して子孫のごれほど役に  
立つのでありませうか七才や五才の子供をのこして短命で歸幽しました後はあれ  
やこれやの紛擾こそ起りますがこの財産があるのであど安心して暮らせる  
といふ筋道の立つ家は稀れであります

わたしはそれよりも慾といふ恐ろしい因縁の基となり喧嘩口論の花をさかせ身上わすらひや憂ひ災難や色々の苦しい事情が起る慾の心を根切りさんげして正しい清い一すじ心にならしてもろふて美くしい家庭の和樂や金銭に替へがたない安心やで日々勇んだ心で通らしていたゞこそ初めてそこに天壽を全ふさしてもらふことがでけると存じられます

わたしの知つた九十ちかい老人をよく氣をつけますとあまり他の事はまだ發見しませんが唯一つわたしの心に感じたことゝもふしますと『あきらめ』そのあきらめのいゝそれこそ執着心がちつともないことでもありますこれは學ぶべき事とわたしは心掛けております

『あきらめ』は『たんのう』でありますそれはたしかに長命する原因のその重なる一つであることを疑ふ餘地はありません  
嘗て教祖様御在世中に

今にどこみても年より計多くなるであちらみてもこちらみても皆老人ばかりやかうおきかせくださいました老人でも多病や弱くてはなにもなりませんわたしの一寸知つている擔任さんでも神田の鳥居會長は八十六で目こそ少し不自由であるが一寸見た處では六十をいくつか越したかと思ふくらいの活潑さであります八十三の高崎の市川會長や八十三の川越會長の小峯さんや七十七の牛込古田會長や實にうらやましいくらいの健康體であります  
なにも心しだいこゝろだけのおはたらきがありますどうか皆さんに於いても日頃からおこゝろがけなされる通り『よくをわすれてひのきしん』その一貫した心でお通りくだされば神の守護にへだてはない皆々長命さしてくださいますまあ今日はこれだけ述べさしてもろふてあとは又の日にゆづることゝいたしませう

南無天理王命——皆さま御苦勞でござりました

### 銷夏漫錄

○おもひで

明治二十八年の頃であつた相馬へ出張していると「結城に事件でけたすぐゆけ」の電報に接した相馬から藤代へ一里を俾で飛ばして上野へ着いたのが六時それからの列車では小山でもう結城行に接続せぬが安閑として東京で一夜を明しかねるので兎も角もと小山へは九時頃に着したしかたなしに車夫に命じて結城にと急がせた行程二里小松のある原や田甫中であるが一人として行ちがふたものもない車夫のいふのに旦那此頃は物騒千萬で時々追剝がでますよ昨夜も何かとられた事をききました御用心なさいとのことであつた

懐中の軽い自分はその事にはちつとも恐れないうで十一時頃にめざす家に梶棒横付けしたが迎ひに出た人がよく無事でこられました坊主等が天理教の者を見たら

横腹へ出入を突込むとの大評判でしたとこんなことをいふて恐れてゐる

自分を鐵道線路と間違へてトンネルなどあけられたらそれこそ大變だと苦笑しながら事件の成行などをきいてその夜は藏の二階の人となつた

塵外居士だとか某寺の僧侶とか状々の理屈をこねて朝から足繁くやつてくる討論會だとか撲滅演説だとか結城はなかなか喧嘩の花を咲かせたものである

當時關與した人は中根碧仙(死) 扇田豊次郎(死) 町田福太郎(死) 中臺平次郎(現存)の諸氏であつた原因は改式者が多くなつたので寺の方からこいつたまらぬと騒いできたのであつた日本橋大教會の人に聞くと其後結城出張所は結城支教會と改稱したが今日でもあまり隆盛の方でないとのことである

序でだからいふが結城出張所を出願するとき町役場へ行くと町長はまだ出勤せぬといふ既に十時であるから自宅へ訪問したすると町長のいふにはあの教會はもう立派に教會の儀式を行つてゐるから出願の要はない故に奥書はできないとのこと

だ  
 こちらは強いて書けといふ書かぬといふ結局此始末を明記して呉れと請求して  
 それを奥書代りとして新宗道の結城郡役所へ来てみると既に退廳後であるやむなく丸  
 屋といふ旅館に一泊して豫定の如く郡役所經由水戸の縣廳へ呈出したがそれでも  
 滞りなく認可になつたそれが結城出張所である

○山高帽

いつぞや宮城拜觀には山高帽に限ると律しられたとして當日は統卒役ときている  
 どうでもかぶらなければならぬので本所の伊藤君のを借りたが故あつて拜觀を見  
 合した

それで思ひ出すのは明治二十四年電信丸で故人上原會長に隨伴して松山へ初め  
 て出張した時にあやしげな山高をかぶつて折柄ぬり立てのペンキが附いてどうし  
 ても除れなかつたことがあつたその頃は平氣で山高を用ひたが此頃は手元に持合

さへなくなつた進歩か退歩か

○電氣

或る書によると人の怒るといふことは五臟六腑を惑亂させるのだ一時の腹立は身  
 體の各部を病的たらしめる囚人の死後に解すると悉くが病的だとあつた

それが一種の電氣であると結論してある「腹立」として堅くおいましめになつて  
 いるのも深い故かなど今更ながら感じている

人は威嚴を示すとか留飲を下げるとかいろくの意味で腹立つものもある中には  
 突然のものもあるが要は血が逆行して各部を損じることが確然のものだゆめさら腹な  
 ごは立つものでない

○ほんみち

高田馬場の牛込分教會に用達のあとで東京驛の切符を市年に求めさせた改缺して  
 電車の中で見るともなく見ると濱松町までとある何の間違ひやらこれでは芝の大



門に降りて日本橋迄約一里を電車するのは迷惑の事じや一層今日は見合たさうすると物識りな人がいふのにそれは代々木で乗替へてゆくのが本道で東京驛迄立派に行きますと説明してくれたこちらは品川の大廻り計りと誤つていたことがわかつた知つた振りの道知りはえてして考へちがいをするのは此類だと飛んだ處で『さんげ』のまゝ

○ 福 耳

わたしは此頃どうゆう風の吹きまはしか善い事ばかりきいて獨りで喜んでゐる四十年祭のために○○支教會長は自分一人で五〇〇〇定めて既にその内の幾分を運びはじめたといふことである  
平素から『やり』そうな人なら不思議とも思はぬが意外な人だけに喜びが活々している

それから或る宣教師の所長の御家内が歸幽せられた在世中はあまり評判がいゝ方

でなかつたがそれから半年ほども過ぎてその教會の信徒がいひ合したやうに是迄あの奥さんに助けていたゞいて居ながらいすんで居て濟まなかつたと云ひ合したやふに教會へ運んで来るやうになつた  
それが爲に教會は急に賑ふて勇んでいる棺を蔽ふて定まるとはよく云ふたものである

もうひとつは部内の會長に近頃どんな様子ですときくと必ず御蔭様で講刑がいさんで参りましたとの言葉が人こそ代るが變らないのはその喜びの言葉である福耳なるかな福耳なるかな永久に耳に幸あれ

○ 小 言

わたしの知る教會役員に心はよいのであるが物をいへばきつと小言をきかされたとつぶやく者があるごうやら自分も小言やだけは親類らしい多辯すまい

○ 肥えた會長と

瘠せた會長

肥えた丈夫らしいから長命と受合へない證據は出羽の海さへ四十九で死んで  
瘠せたからとて加藤男は總理大臣になつてゐる肉の多少が禍福の別るゝ處でない  
が肥えてゐると立派に見えるが瘠せてゐるとどうも貧相のようにも感じられる  
淺草の宮内會長などは骨高な顔の人並すぐれて氣にしている芝の會長吉野さんな  
ども同じ仲間であらふ近い處に見付らぬが稻敷所長の平田さんや牛重の小坂會長  
などは肥えた方であらふ瘠せていれば夏は涼しい肥えていれば冬は暖かいどちら  
も仕合ものだ



川村辨左衛門氏を送る

さんげするやうになつたら己は出直した相馬の會長はいつもそれを繰りかやして  
いた  
それだけ一心がつよい書いたものや本などは大嫌ひで一面それは讀む力も薄いの  
にも依るが

道は言葉ひとつ

それを確信してゐるからであるこの雑誌も送本したが内容も見ないうちから帯封  
のまゝ送つて返へすといふやり方で驚くほどの一徹である  
七間に十二間の大教室から五十坪の客室外は婦人室神饌所住居それからずつと離  
れて教祖殿と約三百坪を算する大構ひは有數で堂々たる大教會といつても差支へ  
ない

若い間は随分道楽もしたばくちもやつたが明治二十三年にお道に入つてからはそれこそ生れ替つた人間となつてこれまで助けられて来たのであつたそして郡長や歩兵中尉やそんな人達が會葬して弔詞を讀んだ時にあゝこれは道の光だとうなづかされた私を乗せた車夫などは若い間のことなどを知つて居つてそして盛葬を見て感に堪えておつた

座四丁目の木村屋が深い親族で多大の力を添えていることも目立つて見えた七十五歳を最期とした川村辨左衛門氏は二月十二日雪解のぬかる道を道仙田の松林の中の墓地へと葬られた

川村辨左衛門氏を悼み奉りて

ふる雪にたぐひやすらん白梅の

散ての後も香は匂ひつゝ

さやけき影

悪の芽はへ

時は或る年の舊一月の元日私は乾物類を入れた荷をかついて寶珠花の埠頭に立ちました

外に五六人も渡るものがありましたやがて渡舟は濁水の流をからうじて河岸につけました

暫らくは乗降で手間どりましたがその内に米を二俵のせた車が御一所にと乗込んで来る

この船頭は竿が弓になる迄も力をいれたが舟は貧乏ゆるぎもしない

私は見兼ねて天びん棒でウンとおしましたすると幸ひ舟は動いたが棒を泥にすいつけられて私は舟から落ちました

親切な人の介抱で向川岸の家で世話になる着物を乾かすやら荷の整理をするやらとても商ひに行けさうになくなつたさうかうする内着物も乾いてお世話の禮をのべて先我家へ歸らうとしますとその家におつた一人が

おいお前は歸るのか最前からこゝでばくちが初まつてゐるのを知つてゐては歸すことができない十錢でもいゝから附き合へとの事でした私は飛んでもないど強いて逃げ出さうとしましたが二三人來てとうとう奥の方へ連れゆかれて無理に仲間入をさせられましたいま思ひますと此時強いて命がけで逃せば一生を誤らなかつたと後悔しましてもあとのまつり残念でございます

心機一轉

こゝで一寸私の成り立ちを申上ますが私の家は粕壁在の幸松と申す處で父は酒屋醬油屋へ人人稼業をいたしておりました

いつも鬼のやうな男が二三人づゝは口がかゝつて來るまで遊んでおりました雨の日などは随分勝負事もやる喧嘩もする及物三味もやりかねないことを私は子供心によく見ておりましたので自ら粗暴な性質になつたことは日頃恐れておりました話は元へもごりますが奥ざしきへ連れゆかれました私は止むなく十錢を奮發しますと運よくか運わるゝか大當りそれが續いて三十圓ほどの勝利を得ました今日は持合がなくなつたと申しますので二圓を肴代にのこして廿八圓を懐中してこゝろわるゝ其處を引上げて幸松の我家へ戻つて父には一切内々で翌日は關宿の方へ商ひに參りました私は一日おきに寶珠花と關宿の渡しは渡るものと定めております翌日はその家へまゐると朝から待つてゐたと計り取まかれて持合した百圓まで綺麗にとられてしまひました